

實主義、唯物主義に對する唯心主義、智力主義に對する情意主義、科學主義に對する宗教主義、客觀主義に對する主觀主義是なり。曩に第五章第一節に述べたりし日本主義の運動(三十一二年)第六章第四節に述べし文藝上の時代精神論の主張と社會小説宗教小説の推獎(同年『哲學雜誌』等の誌上井上元良諸學者が倫理問題を研究して倫理上宗教の必要を論じたる倫理的宗教の主張(三十二年)橋本朔風等が獨逸流の煩瑣學風に對する反抗(三十三年等)皆是れ其の根柢に上掲の潮流の横溢を見ざるなし。清澤高山網島諸家の人生觀宗教觀は即ち此系統を辿りて正に到達すべき境地に外ならず。されば其の思想の根柢には主觀的色調を帶ぶると同時に自ら實行的現實的の賦彩を有す。一世を擧げて倫理宗教の問題に熱中し深く人生問題に立ち入り進んで自己問題に逢著し主觀の權威に想到し遂に走つて三十七年頃の自稱神佛の出現となり或は三十五年以來の個人主義の活動となりし者固より其の所なりと言ふべし。

思想界の此の傾向に附隨して必然的に起る最初の現象は文藝に於ける主觀主義なり。抒情主義なり。詩人の冥想は概ね哲學體系の組織とならずして却て抒情の審美境に入る。當代に於ける文藝の特徴は實に抒情的傾向にてありき。されば曩きに科學主義客觀主義の文藝界に入るや寫實の風潮斯種の大勢力となりし小説神髓の大旗一たび翻つて小説は忽ち心理學の囚ふる所となり『桐草紙』の鋭鋒一たび閃いて文藝作品は悉く美學の囚ふる所となり所有文學は科學の規矩を適用せられ客觀主義の風は創作界を吹き靡けたりしも今や漸く反動を起し和歌に在りては『明星』『白百合』の青年歌人の奔放なる抒情歌となり嘗て客觀描寫を極意とせし『ほととぎす』の俳句漸く主觀趣味を尙ふに至り新體詩に在りては叙事の一體遂に發展するを得ずして泣聲有明林外泡鳴皆主觀冥想の抒情的詩調を取り特に最近の述作に於て神秘空靈の新詩境に突入せるを見る。若し夫れ小説に至りては二十年來全盛を極めたりし寫實小説漸く凋落して混沌飄蕩の裡一道の内省的冥想的主觀的情調を帯び風葉が妖艶なる寫實の筆漸く惱みて方向一變の途上に在り秋聲の特色漸く世に認められ藤村省察の詩風小説に現はれて一味内觀の深きを示し花袋は可憐なる情操を描きし往時の作風を捨て泰西近代の夫れに近

けり。特に紅葉の死は過去寫實小説の一大段落を劃し新陳代謝の現象は争ふべ

からざる當面の事實となれり。

十九世紀科學主義の反動として這般の新思潮が思想界に波瀾を捲起せしは、獨り本邦に特發せる現象に非ずして、實に世界の各隅に遍滿せる大思潮に動かされたる者なりき。三十年來交通の發達、語學の普及、教育の進歩、學術の隆盛、及國力の發展は、泰西文明との交渉をして比隣よりも容易ならしめ、彼の國の學術文學の輸入益々盛にして、彼の思想感情に觸るゝ事愈々密に、其の推移は直に本邦思想界文學界に影響するに至れり。されば彼國に於て、晚近科學主義の反動として、ニイチエの超人思想、オルキイの放浪思想、マーテリックの神秘思想等の現るゝや、直に本邦思想界に影響し、茲に自我發展主義、天才主義、個人主義、神秘主義の思想を醸成するに至りぬ。三十四年頃勃興したりし論壇の新ロマンチズムは、即此の風潮の所産なりき。

然れども此の物質的文明に反抗して心靈生活を鼓吹する一道の思潮の本邦文壇に存するは、決して無前の珍事に非ず。夙々二十年代に『女學雜誌』あり、『文學界』ありて、文壇の一隅に其の峻峭清新の聲を揚げたりき。特に『文學界』は人生問題の

北村透谷

煩悶に關する幾多の言説述作を載せ、所謂世紀末の一種の思潮既に其の間には見たりしなり。北村透谷が世を破り世を壞ち一切の傳習を滅絶して、新生の光明に浴せんと努力せしか如きは、正に斯界先覺の聲と言ふべく、彼自ら及藤野湖白堂の悲惨なる最後(二十七年及二十八年)は實に時代の犠牲として仆るゝ新人の必至的運命と見つべし。されど透谷等の運動は時代に先づ事餘りに遙にして未だ世人の耳目に入らず。其の一代の思想を動かして社會の表面に現はれ來りしは實に此の次の運動を以て初めとなす。三十一年詩人晚翠カトライルの『英雄論』を紹介し、其の序に、舊信仰既に廢れて新信仰未だ起らず、靈界嚮導の光明暗中に沒して民心其の憑依する所を知らずと道破せしより、續いて三十四年樗牛竹風『太陽』『帝國文學』の誌上に、ニイチエ主義の大旗をかざして八方に馳突するに至り、天下青年の思潮翕然として之に向ひぬ。

竹風

樗牛論壇に立ちて既に六年、其の思想の徑路に幾變遷ありきと雖、其の間常に一種の煩悶の閃くあり、人生の理想と現實との扞格に由來する無限の懊惱が片言隻語に現はれて、遂に凡俗世界に對する反抗の聲となりぬ。三十二年近代主義を説

樗牛

き翌年當代の文壇を論せし態度は正にこの反抗の第一撃なりき。同年ニイチエの訃音傳はり、其の超邁豪放なる個人主義超人主義の思想普く弘まるや、靈界一點の火を點せられて主觀現實の思想の中に芽ぐみ初めたる自我の觀念炳乎として燿き出でぬ。爾來文明批評家としての文學者を論じて文明に對する個人の反抗を説き、嘲風に與ふる書を裁して現代文學を非難し、美的生活論を唱て奔放なる本能主義を呼號し、遂に進んで平清盛日蓮上人を讚美して自我主義天才主義を發揮するに至るまで、現代一切の事物を破壊して新しき文明新しき道德新しき文藝を打立てんとする活動猛烈にして當るべからざる概ありき。かくて梶牛は一代新思想の指導者として三十五年世を終るまで健闘の筆を絶たず、勇士千軍を叱咤して陣頭に立つが如き態度を以て絢爛痛烈の詞章を行ひ、崇高なる詩調一脈の靈氣を放つて直ちに人の肺腑を衝き、當代の青年をして勇躍として自己心靈の聲を聞く思あらしめたり。彼れの評論は此點に於て宛然創作たり。其の理路を辿り其の曲直を剖判すれば忽ち破綻百出せんも、奔放熱烈なる思想筆力直ちに迫つて人を魅するに至つては、洵に詩人の境地創作の領域に入れりと云ふべし。ニイチエ

を以て詩人なりとなすべくんば、梶牛は疑もなく現代精神を顯ひ出せる卓拔なる詩人なり。彼れの眞面目は美學者たるよりも美術史家たるよりも批評家たるよりも、むしろ此の方面に在り。

思想界の新傾向の遂に到達すべき個人的自覺はかくして世に普く、新ロマンチズム、本能主義の稱呼は一代の人心を震ひ撼かしぬ。世に稱して狂時代と言ふ。思ふに維新以來唯物的文明の上に立つ從來の倫理宗教に安立して何等求むる所なかりしもの、一朝國民の自覺と共に唯心的思索に入るに及んで、忽ち儒佛道德に疑を懐いて心靈の空虚を感じ、新なる充實を憧憬して何等與へらるゝ所なきまゝ、去つて懷疑破壊の極端に趨り、茲に思想界の過渡時代を出現せるに外ならず。而して此の思潮は直ちに文藝界に影響して、前章に説けるか如く、或は晶子の『亂れ髪』となり、或は風葉の『醒めたる女』、『涼炎』、『沼の女』、『秋聲』、『春光』、『荷風の』、『地獄の花』、『夜の心』、『花袋の』、『重右衛門の最後』、『竹風の』、『洗ひ髪』となり、甚しきは從來往々反道徳なりとの非難を蒙れる自然主義的傾向の文藝は茲に有力なる聲援を得たるものゝ如く、又一種の學理的是認を與へられたるものゝ如く誤解せられ、本能の暴露は

即ち時代の精神なりと妄断せらるゝに至り、遂に趨りて所謂世紀末の病的思想をすら文藝の上に現すに至れり。次節に述ぶべきデカマン傾向即ち是なり。

第二節 海外文學の輸入

吾人は前節に於て我最近の思想及文學の特質を擧げて、内省的實行的個人的主觀的の數條を算したり。今や進んで此の特質を帯びて現はれ來りし新興文學を敘せんとするに方り、豫め之が先驅となりし二三の文界現象を述べて其の由來を詳にせざるべからず。而して此の叙述をなさんには、當代の新潮を捲き起すに最有力なる動機となりし海外文學の輸入紹介に就て記す所なかるべからず。
○維新以來新文學の勃興を始めとして文壇の新事象、一に海外文學の影響に出でたる事は、本書一卷の説ける所によりて略推知するを得べし。此の點より見れば我明治文學の歴史は畢竟泰西文學輸入の歴史に過ぎず。特に前章既に説けるが如く、最近語學の進歩思想の發展交通の繁榮は、一層彼此の觸接を密ならしめ、翻譯紹介の流行又往年の比に非ず、第六章第四節に述べし趨勢は益々其歩を進めた

プラト
ン全集
新全集

り。三十四年以來詩歌小説の翻譯の出づる事前後相望み、詩人文豪の評傳亦少からず現はれ、プラトーン、シークスピアの全集すら翻譯し初めらるゝに至りぬ。而して其の間おのづから以前の翻譯界と異なる現象を呈して當代の特色をなせるを見る。異色とは何ぞや。露佛文學を主とする大陸新文學の流行是なり。
第二期並に第三期に於ける泰西文學の中心をなせしものは英獨の文學なりしや論を俟たず。政治小説時代は更にも言はず、逍遙の英文學に於ける、爾外の獨文學に於ける、各一時代を劃して其の傾向を代表するの觀あり。特に英語の普及は此の國の文學をして最よく我國民に親ましむるに至り、泰西諸國の文學も主として英譯によりて其の面影を窺ひ、翻譯の如きも多くは英譯より重譯せるものに係る。文科大學の外國文學科中英文學科は最早設けられ、最多數の學生を有し、早稻田專門學校文科の外國語は即ち英語に止まる。然り一般社會に於ける英語の勢力は依然として隆盛を極むと雖、最近思潮の變遷の急激なる、從來紹介せられし英國クラシックをば漸次文壇の中心より遠ざからしめぬ。前章詩風一轉の機を愈せる條に示せる如く、最近の文界は又莊重博大なる英國クラシックを味ふの餘裕と

趣味を缺き、只管輕快と短小を求めて露佛新文學に赴き、保守的秩序的道德的なる大英古文學に同情する事能はずして、専ら懷疑的破壊的進歩的なる大陸新文學に趨りぬ。特に新ローマンチズムの運動起るや、社會の現狀學界文界の狀勢に不満を抱く者、相率ゐて大陸新文學の破壊的虛無的自暴的なるを歡迎し、從つて同じく大陸文學の中にも從前歡迎せられしダンテ、カルデロン、セルバンテス、ゲーテ、シルレル、ユーゴー、モリエール等の如きよりは、寧ろ最近佛國デカダン詩派、象徴詩派、佛國自然派、獨國自然派、露國自然派、那國イブセン、伯國マートルリンク、以國ダンヌンチオ等の小説戯曲を喜ぶに至りぬ。勿論ツルゲネーフ、トルストイの如きは、二葉亭隨外等によりて夙く二十一年より紹介せられ、ドストエフスキイは魯庵によりて二十六年既に世に知られ、ビエロロチ、ゾラ、モーパッサン、ダンヌンチオ、ゾリ等は上田柳村等によりて三十年前後移植せられきと雖、當時は唯漠然諸國の文學を知るに從ひ輸入紹介するに止まり、未だ民性の相通する所思潮の相應する所を自覺し、自己と同じきものを其の裡に見出でたる熱烈の同情を以て之を鼓吹獎説したる者に非ざりき。就中、二葉亭嵯峨の屋抱一庵、共に露國文學の紹介者

を以て知られしも、未だ積極的に新思潮を捲き起す活動に加はらざりき。當時の讀者は唯譯文の巧拙を言ひ、譯解の正否を判するのみにして、之に對する態度は猶ショークスピア、ミルトン乃至マコーレー、カーライルの譯書に於けるが如く、極めて超然たる者なりき。然るに新思潮の文壇に入るや、新なる意義を以て魯庵の『罪と罰』を推し、二葉亭の『片戀』『浮草』を薦め、後ればせに讀して吾人の胸奥を動かす者ありと唱説するに至りぬ。

三十四年、月郊の『イブセンの社會劇』、柳村の『みをつくし』、花袋の『西花餘香』以來、三十六年、孤蝶の『宿り木』、三十七年、竹風の『賣國奴』、ズーデルマン、三十八年、魯庵の『復活』、トルストイ、柳村の『海潮音』を始め、ワグネルの歌劇イブセン、ハウプトマン、マートルリンクの劇、ズーデルマン、モーパッサン、バルザック、フローベール、ドードー、ゾラ、ダンヌンチオ、ゾリ、ゴルキー、ツルゲネーフ、メレジコフスキイ、チエホフ、アンドレーエフ、ヒュイスマン等の小説、ボードレー、エルレーン、マラルメ、エルハール、モレアス、ローデンバッハ等の詩歌續々我に移植せられ、昇曙夢、瀨沼夏葉等新進の露國文學研究者亦輩出し、近年特に其の旺盛なるを見る。是等の大陸文學が新興の文學に影

響して、詩歌小説戯曲、所有方面に目ざましき變化を遂げしめし質相は、蓋し豫想の外に在り。要するに本邦の文學は日に月に泰西文學と近接呼應するに至り、彼の地文壇の推移は直ちに來りて我文界を動かす事、是れ近時斯界に於ける著しき現象なりとす。

第三節 象徴詩の勃興

海外最近文學輸入の大勢は略前述の如し。而して先づ之が直接影響を創作の上に現したるものは新體詩なりき。前章既に説きしが如く、神秘空靈を尙ぶ一派の詩風斯壇一轉の兆を示し、が三十七八年の交に至りて遂に象徴主義の形を取りて其新面目を現し來れり。

象徴詩派の作風及作家の我文壇に紹介せられしや、近日の事に非ず。「文學界」『帝國文學』夙に海外詩壇の新風を紹介し特に上田柳村之に勉めたり。吾人は二十九年既にリイル、エルレエン、ボードレエルの名を聞き、三十二年バルナツジャン、サムボリスト、エルリプリストの名稱を聞き、彼等の詩には聯想の力視聽嗅味の官

能を交錯する消息のよく現はれたるを學び待たりき。然れども當時の詩壇は尙搖籃期に屬し、文界一般の幼稚なることも未だ此詩風の直接影響を受くるに至らず。吾人は唯幽婉微妙奇峭妖艶なる一派の詩風として白眼に看過したりき。爾來十年詩壇は日に新しきものを追ひ、既にテニズン、ラルヅラルス、バインズ、キーツを棄て、ロセチ、スキャンパインに就き、ラファエル前派の詩風一時文壇の流行なりしに、今や轉じて、デカダン、サムボリストの名喧傳せられ、技巧過重官能過重の詩風世にもてはやさるゝに至りぬ。

三十八年、有明『春鳥集』を公にし、前年來此新詩流を汲みて作れる所謂象徴詩を編み、之に序して其詩見を表白せり。曰く自然と我とは一なり、自然の呼吸を我に感じ、我の影を自然に見る。既に詩想に此の新意あらば、其表現に新なる方式を要するは自らなる勢なり。かの音節格調措辭造語の新意に適はん事を求むるときも、邦語の制約を寛うして近代の幽致を寓せ易からしめんとするは洵に已み難きに出づ。視聽の官能は常に鮮かに、常に生意を保たざるべからず。視聽は又相交錯して近代人の情念に雜り、こゝに銀光の音あり、こゝに嘲哂の色あり。管に心眼

有明
「春鳥集」

と心耳とあるのみならず、われは靈の香味をも嗅味の官能に感ずる事あり。嗅味を稱して卑官といふは官能の痛切を知らざるものなりと。而して「日のおちば」に詩人の信念を日月の光彩に比し、「朝なり」に白壁を吾胸として壁に映せる魚河岸の景を叙し、「五月鶯」に鶯と朝戸との響を藉りて戀情の發作と其の瞬間に褪めたるを抒べ、「わが思ひ」に夏の炎熱を人の心に比べ、其他君にさゝぐ「みな」といり「家根の草」等、皆感覺印象交錯の技巧を弄して何等かの暗示を寓せんとするに似たり。然れども彼の創作は彼の詩見の實現と見んには尙渾成の域に遠く、所謂サムボリストの模倣としては象徴的技巧未だ完からず。發達の初期に於ける試験的述作としては蓋し已を得ざるに出づと雖、晦澁漂腫の謗は遂に免る能はざりき。

遮莫有明の詩觀と製作とは疑もなく佛國サムボリストの紹述模倣なり。利弊共に繼承せる因より其所なり。夫れ佛國サムボリストのバルナ、ジャン詩社を壓倒して文壇に地歩を占むるや、時人は彼のポードレエル一派の詩人を稱してデカダンといへり。デカタンとは衰退の義なり、神經質の言ひなり。世紀末の人心を浸蝕せる神秘の思潮主我の傾向現實の風尙發して知力の減退となり、神經の衰弱

となり、情緒獨り盛にして官能過敏に陥る。其結果思想と感覺との交錯となり、感情と官能印象との交錯となり、若しくは官能印象相互の交錯となり、こゝに灰色の思想あり、こゝに赤色の詩歌あり。さては光る音、響く色、匂ふ聲、心靈の味も舌頭に感せらるゝに至る。以爲へらくかゝる状態の下に外界の事物に遇して茲に催起せられたる一種縹渺たる情緒を寫し取れるもの即詩なり。詩歌に重んずる所は思想に非ずしてこの情緒なりと。かゝる幽婉微妙なる情緒を傳へんには、おのづから從來の詩技に異なる一新技巧の發達なるべからず。即ち官能的手段によりて讀者の神經をして或る情緒を起さしむるを得ざらしめ、この情緒の中におのづから作者の傳へんとする心的状態を捕捉するを得しむるは、彼等詩人の新技巧なり。故に詩歌の對象を直接描出する事を得ずして常に一種の象徴を用ひ、思へらく對象を明にするは詩の享樂の四分の三を失ふなり。詩の享樂は其の暗示を解くの快なりと。彼等が只管形式の彫琢に勉めて隱言微辭縹渺たる韻致あらん事に腐心するも之が爲なり。此の作風の佛國に起り獨乙に入るや、墮落頹廢を以て之を斥けたる批評家少からず。曰く神經衰弱して主我の念のみ盛に、現實の官能に拘

して想像力思考力なく、徒に神祕を衒ひて濛朧含糊に陥る。要するに官能過重技巧逼重の病的狂的の現象なりと。思ふに其の表現せんとする詩人の心的状態と、之を表現するに用ゐたる詩的技巧とが上述の如くならば、其の表現の形式に卓越群を抜くものなくんば、晦澁濛朧、同臭味の小範圍にのみ解せらるゝ狂的詩歌なりとの非難を招かん事異むに足らず。我『春鳥集』の詩人一派は即ち此詩風を移植したるものなれば、所有特色と缺點とは共に其粉本によりて窺ふを得べし。特に晦澁難解の謗りを聞く事多かりしは其本源の既に此傾向を帯べるに加へて、象徴的技巧の未だ至らざるものありしによる。

此の詩風は有明に至りて意識的に本邦詩界に移されたり。然れども有明の新詩見と創作とは柳村の紹介と翻譯に負ふ所少からず。柳村近年此新詩派を推奨すると共に、『明星』『藝苑』等の諸雑誌に其の名篇を譯載し、當時の詩界をして佛國象徴詩派の一斑を髣髴せしめたり。三十八年末に出せる譯詩集『海潮音』を見るにポードレエル、エルレエン、ローデンバッハ、エルハーレン、レニエ、モレアス、マラルメを始め、新詩派の譯詩最多きに居る。同年又片山孤村『帝國文學』に獨乙象徴派を紹介

柳村

『海潮音』

泣壺

『白羊宮』

し、角田浩々『讀賣』に之を論述し、此の詩風は漸く文壇に勢力を張り來り、翌年公にせられたる詩集『あやめ草』の諸詩人は概ね此の傾向を帯び、曩に暗中摸索唯漠然と神祕を戀ひ空靈を慕ひ、求めて得ざる動搖の聲を揚げたりし人々も、茲に至りて稍明かなる道途を見るを得、聊か之に安住して向ふ所を定めぬ。こゝに於てか詩界は、從來模倣したりし『暮笛集』の詩風を棄て、一轉して『春鳥集』の新傾向に就き、泣壺の如きも從來の古典的情操的作風より漸く變じて象徴派的色彩を帯ぶるに至れり。之を當時の詩集『白羊宮』(二十九年)に徴するに、自然物特に動植物に感興を寓せて其中おのづから人間生活の趣致を象徴せんとし、色香味觸の官能印象を其等の上に見出で、各々の特色を感覺的に表現せんとする傾向著しきものあり、所謂自然の中に我を感じ我の中に自然を見んとする象徴詩派の面影を存す。『零餘子』『日記』の如きは蓋し此の方面の代表的作品なるべし。

かゝる間に有明が象徴的技巧の完からざるもの漸く熟し來り、嘗てデカマン詩派の新彩に酔うて事を見景を捕へては直に何等かの象徴となさんと試み、或は事象に對して起せる情緒興趣を如何に象徴すべきかの問題にのみ苦心し、其結果象

徴と其暗示せんとする對象との渾融を失ひたる缺點は漸く脱せられ、人の如く呼吸し痛苦する自然を藉りて人生をシムボライズする技巧は著しく進めり。此間の消息は最近の詩集『有明集』四十一年に於て畧窺ふを得べし。かくて此潮流は青年詩人の間に洋溢し、『明星』の作者多くは日常卑近の事物に實際生活の意義を暗示せんとし、或は銀行砲兵工廠を歌ひ、或は試験場鐵工場を賦し、或は機關車川蒸汽を詠じ、總て象徴的技巧の應用に苦心せり。

以上述ぶる如く我象徴詩は實に佛國デカダン派の模倣に起り、新を追うて一變化を試みんとせる、時流に乗せるものに過ぎずと雖、又是れ當時思想界文藝界一般に亘れる世紀末の大思潮が曠々の中斯界にも其波を揚げたるに外ならず。其の神秘的趣致といひ、主我的傾向といひ、官能的特色といひ、現實的風尚といひ、擧げれば一として第一節に述べし時風ならざるはなし。

第四節 自然派小説の源流

曩に時代精神論起り實世間に切實に觸れたる作品を要求する聲盛なるや、一方

天外

に於て政治小説家庭小説を起すと共に、他方に於ては從來硯友社一流の寫實小説も亦著しく其の風采を變更せられたり。後橋牛の近代主義の文學を説き海外最近文學の輸入連りなるや、小説壇の新傾向は茲に新興自然主義の形を取り現れ來りぬ。『初姿』三十三年以來、はやり唄三十五年に至るまで、毎に寫實小説を標榜せる天外は、其の作の巻頭に序して曰く、自然は善でもなく悪でもない、美でもなく醜でもない、小説亦想界の自然である、善惡美醜の孰れに對しても叙すべし叙すべからずと羈絆せらるゝ理由はない、唯讀者をして、其の官能が自然界の現象に感觸する如く、作中の現象を明瞭に空想し得しむれば足る、詩人は唯其の空想したる者在りのまゝに寫すべきのみで、讀者の感動すると否とは其の關する所でない、詩人は描寫に臨んで其の間に一毫の私を加へてはならぬと。言ふ所描寫の態度に止まり其の内容に及ばずと雖、主張の存する所を見るに、新興自然主義の一面を捉へたるに近し。

然れども天外の作品はゾラ一流の科學的實驗小説なり。心理の描寫に加ふるに生理の描寫を以てし、或は遺傳の説境遇の論に依り、或は酒毒浸染生存競争の理

法を取り、科學的研究を以て性格事件の發展を辿らんとす。されば其の態度は頗る十九世紀科學萬能の思潮に順じ、最近の主觀的主我的傾向と相容れざるの觀あり。三十六年の『魔風戀風』三十九年の『ユブシ』共に一時青年讀者間に喧傳せりきと雖、深く其の内容を検する者、當代思想界を覆ふ特種の暗流を其の中に見る事能はず。特に『ユブシ』の如きは、唯かの主人公の血管を環れる強烈なる遺傳の勢力が、不知不識の間に有爲の青年が向上努力の意志を侵蝕し、遂に彼をして力爭煩悶の後甘んじて之が犠牲たらしむるに至りし経路を描きしに止まり、長篇全卷遺傳説を祖述せんが爲に作られたるかど疑はる。されば天外の作は一代文運に對する關係甚深からず。唯其の主張に於て、從來の字烹句煉文辭を以て讀者の涙を絞らんとする作風を排し、自己の想像の最自然なる描寫を唱説せるの一事は、新興文學の源流を探るに於て看過すべからざる事象なるべし。

若し夫れ作の内容に立入り露佛新文學の影響を具現したる者を求むべくんば、蓋し風葉の『青春』を推すべし。風葉は固と時代思潮の推移に鋭敏なる感受性を有する作家にして、先きに新ロマンチズムの運動起ると共に『醒たる女』『涼炎』を出

風葉

「ユブシ」

「青春」

せしが、爾來露國小説家の新作風を究め、三十六年『へと日記』『翌年』『未成年』をものしてツルゲネーフの雛案を試み、三十八年遂に『ルーヂン』に暗示を得たりといへる大作『青春』を草しぬ。作者は主人公をして時代の病弊に侵されたる青年を代表せしめ、智力徒に進みて意力乏に伴はず、感情旺盛なれども移り易く醒め易く、而も主我の念強烈にして時には冷酷なる行動を取る事ある一性格を描いて委曲を盡し、天外が唯事象の表面をさながらに描寫せんと努めしに反し、現代思潮の内面に突入して其の缺陷を剔抉せんと試みたり。然れども唯、時代青年の弱點を擧ぐるに急にして、未だ現代の如き時勢に生れ現社會の如き境地に育てられたる青年は、不知不識かくの如き性格を作りかくの如き缺陷に墮せざるを得ざる消息を描寫するに及ばざりき。時代の大背景を髣髴せしめ、此の背景の中に人と爲りたる青年が悲惨なる犠牲者となり行く真相を躍如たらしむるが如きは、遂に之に窺はれず。爲に讀者をして單に斯かる性格の人を刻劃描寫せる寫實派の作品と相距る事遠からざるを感せしむ。特に作者獨得の艶麗なる筆致は、興味中心主義の作品に於ける技巧の精粹を盡くして、往々此の新性格の描寫と相乖離せんとする傾なきに

非ず。要するに作者は現代生活の内面を知る事明なりと雖、其の中に没頭して之に呼吸し之に感觸し、斯くして得たる自家の主観を描出する新態度に出づる能はざりしなり。此の點に於て『青春』は正しく新舊兩作風の旋轉軸に在る者といふべし。

斯かる間に露佛新文學を研究して深く其の趣味を身に體したる結果、意識的に舊來の態度を棄て、新作風に就かんとする作家あり。花袋是なり。曩にニイチエ文壇に知られ自我發展主義の唱道せらるゝや、花袋前期に於けるセンチメンタリズムの作風を棄て、『重右衛門の最後』三十五年をもものしぬ。主人公及之に配せられたる一少女は本邦に珍しき性格を帯び特に少女は野獸の如き自然兒にして其の主人公に對する關係など、ゾーデルマンの『猫橋』を想起せしむ。次で翌年短篇『女教師』を出し、が是亦ハウプトマンの『アインザーメンメンジエン』を模して孤獨寂寥の時代病を描けり。爾來花袋の態度一變し、三十七年『露骨なる描寫』と題して描寫の技巧を論じ、十九世紀後半の泰西新文學の技巧は從來の修飾誇張を破壊して偏に露骨自然を尙び、形式の彫琢を斥けて直に時代内面生活の眞を描出せりと述べ、

花袋

自ら之を本邦文壇に試みんと努めぬ。

然れど一般文壇は未だ此の新運動の意義を解せず。未だ其の價値を認めず。新ロマンチズムの大なる破壊運動の後を承けたる我が評論界は依然として混沌の裡各、其の道途に迷へり。此の時に方り未曾有の新彩を帯びたる一新作品の出づるあり、文壇始めて向ふ所を明にし、所謂自然主義の語は先きに第六章第四節に述べし者とは全然別種の意義を以て唱道せらるゝに至りぬ。三十九年春藤村は長篇『破戒』を出して世に問へり。『破戒』は舞臺を信州に取り、社會の別階級として穢多を排斥する舊思想の強烈なる状態を描き、其の種族に生れたる主人公が先輩の激勵理智の發達よりして自己の素性を恥とせざる信念を有しながら惡辣なる社會の壓迫に堪へず、痛苦煩悶亡父の戒を破つて隠し來りし素性を告白するに至る一種新しき個人の哀愁を寫し出でし小説にして、之を行ふに理路説明の主観的筆致を以てせずして、勉めて客觀的敘述の態度に出で、其の文辭も精練周到を極めながら尙天外風葉の濃艶誇張を避けたり、げにや個人對社會の衝突は小説の題材としては夙に陳套に屬すと雖、『破戒』に現はれたるは別に新味の掬すべきあり

藤村

『破戒』

て、深く人生の嚴肅なる方面に著し、痛切なる生活問題に觸れたり。夫れ從來の小説に於ける個人社會の衝突は、多く戀愛中心の現象にして、主人公は生活上の所有關係を有せざる觀ありしも、此の小説に於ては即ち生活中心の事件にして、主人公は社會に生きんとする個人の欲求を懷いて茲に湧出づる悲哀を名殘なく味へる者なり。換言すれば、新しき自覺に伴ふ生活の願望と之を毀けんとする社會の舊俗との衝突、及俗習を破らんとする智識と舊慣に従つて一時を安うせんとする感情との争闘、此の内外二面の痛苦よりして惹すべからざる創痕を負へる者なり。『破戒』の新味は即ち此の點に存す。よし其の描寫の技巧尙精美に過ぎて所謂露骨なる描寫に遠く、作爲の跡往々露れて未だ僞らざる人生の表白と稱するを得ずと雖、泰西近代自然派の面影を傳へて新生命を文壇に寄與せる功没すべからず。蓋し藤村の泰西文學を翫賞するや久し。特に大陸諸家の作を好み、『綠葉集』中の舊作短篇多少露獨近代の韻致を移せり。而も其の傾向の明瞭なる色彩を以て一世を動かしたるは實に『破戒』に始まる。

『破戒』出で、斯壇の形勢一變し、或は此の作を以て泰西自然派の問題的作品に近

獨歩

「運命」

しと稱し、或は郷土藝術の趣を具ふと唱へ、或は無戀愛小説と名け、多くは其の新彩を謳歌し、延て從來顧みざりし一作家國木田獨歩の價値をも認むるに至りぬ。獨歩は決して新進作家に非ず、前期夙に新體詩家として知られ、『國民の友』『國民新聞』に短篇を草し、既に三十四年『武藏野』三十八年『獨歩集』を公にせり。然れども當時天外風葉の寫實小説、蘆花春葉の家庭小説の流行せし文壇には何等の注意を惹かざりき。然るに三十九年短篇集『運命』を出すや、俄然評壇の稱讃を得忽ち自然派の大家を以て目せられたり。蓋し獨歩の作は當時一般の作品に比して著しき特色に富めり。一道の新彩を有せり。彼の小説は世相の寫實に非ずして問題の解釋なり。情の機微を描くに非ずして智の煩悶を描くなり。かの戀愛を生命とする所謂小説的人物を寫すに非ずして痛切なる生活問題に觸れんとするなり。興味に富める人生を描くに非ずして敗れたる人生の悲哀を描くなり。總て傳習的古典的思想に反抗して卒直に人生の眞を暴露せんとす。思へらく從來の作、西鶴近松にせよ、紅葉露伴にせよ、人を人として描くのみにて之が大自然と相繋る所に觀及べる者なし。偉大なる自然の壓迫におのゝく人間を見得るに非ずば其の作や

空論に終らんと。乃ちツルツルスに赴きツルゲネーフに參し、一種の自然觀運命觀を形作りて之を短篇に披瀝せり。「空知川の邊」の如きは正に其の標本たるべし。「正直者」等に肉の力の壓迫を寫せるも即ち人間の内部に存する自然力を見たるに外ならず。而して其の敘述は露骨直截、其の文辭は素朴簡明、直に思想の眞髓に透徹す。此の新味や實に『破戒』に存する其れと一道相通する者あり。特に自然の描寫往々神に入り、人生と渾融默會する所亦『破戒』と同じく、地方色天然趣味を重んずる當代の新要求に投合せり。要するに從來の小説と異なるは、嚴肅なる人生の眞實を觀照して内省考察をなし、其の結果を自由に大膽に敘述せる點に在り。然り、此の特色は『武藏野』の當時より既に存し爾來今日に至るまで未だ嘗て其の態度を變せず。會々文壇の潮流盤旋して恰も暗合默契する所あり、作者をして忽ち名をなさしめたり。

思ふに獨歩の作品は哲理を説くに小説の形を以てせる者、問題に對する感想を敘するに小説の結構を藉りし者、人の情感に訴ふるに非ずして理智に訴ふる者、之を文藝の立場より見て尙夥多の缺陷を有す。彼は思想の文人、理智の詩人なり、技

巧の詩人、妙筆の作家に非ず。彼自らの言によりて見るも、彼は世人の稱する如き自然派の小説家に非ず。花袋藤村の如き泰西新文學の研究者に非ず。唯彼の性格の然らしむる所、文界時流の如何に顧慮する事なく、胸臆を衝き來る人間生活の嚴肅なる事象に對し、偽らざる自己を暴露する態度、及ツルツルスに骨を得て所有修飾を棄却せる簡勁粗朴の文章が、會々自然派と呼吸相通ふ所ありしなり。所詮彼の自然主義は彼自らの人格より來れる者、學んで得たるに非ず。翌年又『濤聲』を刊して一層平淡なる描寫を以て一層淺近なる事象に托せる人生の特殊相を發揮せり。

三十四年來起り初めたる文壇の新運動は泰西新文學の輸入と相縁りて小説界に入り、遂に上述の如き革新を成しぬ。顧みて之を過去の小説に比較すれば、其の差實に鮮少に非ず。先きに樗牛文藝中心の主義を以て社會の所有事象を論議するや、文藝をして哲學的基礎の上に立たしめんと努め、一方に於て哲學者の視聽を文學に集め、他方に於て文學者を鞭つて哲學的評論を容るゝに足るべき意義内容を有する小説を作らしめんと力めぬ。爾來逍遙紅葉時代に尙多少殘存せりし戲

作の興味を擺脫するを得、描寫の對象從來と同一なるものにて、著想の土に一種哲學的歸趣を示すに至りぬ。従つて以前は情緒偏重の傾ありて殉情の行爲に厚き同情を表せしに反し、今は著しく理智の分子加はり、同じく戀愛を描くにも單純なる情熱のみの行動例へば柳浪の心中物の如きは興味を惹かずなり、生活問題など理智によりて起る苦悶を加ふる事少からず。其の代りに自我の念獨り強烈となり、犠牲の念日に衰頹に歸し、自殺情死の如き悲劇は漸く減退しぬ。又從來小説の主人公は多く無教育にして、其活動の舞臺は主として下層社會若しくは遊里狹斜の巷なりしが、今は人情活動の主體を比較的教養ある男女に取れる者多く、従つて舞臺は移りて上流中流の家庭又は社交界に赴き、過去の社會組織に在りては性情の自由なる活動を見難かりし上流社會教養ある社會にも、今は至る所に意味深き複雑なる人情の種々相を現するに至れる近年世態の變遷を其の儘に活現せり。且つ従前に在りては新小説家は概ね青年にして、讀者評家も亦青年なりしも、今は彼等既に壯年となりしかば、往時の如き年少男女の夢の如き戀愛談に満足する能はず。後進年少の作家讀者も亦思想の進歩に連れて意義ある作物を要求するに

至り、茲に所謂中年の悲哀を描ける者、壯年の主我的觀念を寫せる者を生じぬ。

第五節 俳諧派小説の出現

三十八年の初、文壇は新なる作家を小説界に見出で、いたく其の類例なき新彩に驚かされぬ。夏目漱石は從來「ほととぎす」派の俳人として、若しくは單に英文學者として知られたりしが、此の年倫敦塔を『帝國文學』に「我輩は描である」を「ほととぎす」に出し、續いて數篇の小説を公にするや、世人は其の冲融澹蕩とも稱すべき俳諧趣味の洋溢せる新作風を見て俄に之を推重し、即ち斯かる作風を導ける源泉を探りて俳諧派の寫生文に想到し、時恰も盧子四方太等が「ほととぎす」誌上の寫生文多少世の注目を惹けるに際しければ、寫生文の名忽ち文壇に重要な意義を有するに至れり。されば今漱石が作品を敘するに方りては、勢之が傳統を尋ねて寫生文發達の跡を辿らざるべからず。

三十二年子規既に俳句革新の業を終るや、從來俳句に用ゐたる客觀寫生的手法を散文の上に試み、名けて寫生文と稱し、「ほととぎす」誌上主張と作品とを掲げて斯

子規

派俳人の間に之が研究を促しぬ。思へらく藝術の生命は外界事象に對して起せる感情を偽る事なく描寫詠出するに在りと。彼は此の藝術觀を以て新俳句を試み新和歌を試み、時には小説をも、し、繪畫を論じ、進んで寫生文を起しぬ。されば當時彼等の所謂寫生文は猶其の俳句の如く、客觀的態度を以て自然の片影を捕捉致寫し、其の間に作者の私意を加へざらんとする者、言はゞ自然のスケッチに過ぎずして、其の名稱の如きも繪畫に於ける術語を藉り來りしりき。故に描寫の對象は外界自然を主として人事を取らず、よし人間を描くも單に自然景象の一部として點じ來るに過ぎず。従つて其の間に意義あり歸趣あるを要とする事なし。特に當時は尙同人間の研究習作中に屬し、『寒玉集』寫生文集『出でしも文壇に何等の反響を見ざりき。されば、『寫生文集』中倫敦消息を載せたる漱石の如き、おのづから此の系統に出で、筆力後年に劣る事なきに係らず、未だ其の存在を認められざりき。然るに漱石が『猫』を出して文壇を驚かせしに方りて、他の虚子四方太鼠骨等亦文壇大勢の影響を受けて多少作風に新味を加へ、其の技巧に著しき進歩を示し、時恰も天外等が客觀寫實の主張あり、續いて自然派の主張の一部として描寫の眞實

『寫生文集』

自然ならん事を鼓吹するに際しければ、其の間一味相通する所あり、從來文壇の一隅に伏在せりし寫生文俄に其の中心に紹介せられたり。三十九年文集『枕立貝』の出てしは正に此の時とす。

此の時に方り、寫生文の作家も、從來人間を點景とせる自然の上のみ開きし觀照の眼を移して人間生活其の物の上にも開き、更に進んで其の描寫の手法を用ゐて一篇の小説を作成せんと試みるに至り、中には漱石に粉本を得、外には文界新潮の眞實なる描寫を要求する聲に刺戟を得、茲に寫生文の上に立ち俳諧趣味を帯べる一種の小説を生み成せり。同年より翌年に亘り、虚子を始め、として伊藤左千夫、鈴木三重吉、寺田寅彦等が『ほととぎす』の上に試みたる者、佐藤紅緑が初作『行火』等即是なり。世に稱して俳諧派の小説と言ふ。而して是等作家の巨頭として夥多の追隨者を出し、文壇の中心に至大の感動を惹起せしものは言ふまでもなく漱石其人なり。

虚子

漱石

漱石既に『倫敦塔』『我輩は猫である』を出し、續いて『幻影の盾』『薙露行』『趣味の遺傳』『坊ちゃん』『草枕』等を草し、三十九年『深虛集』四十年『鴉籠』の二集を結びて世に

間へり。其の一作毎に新生面を開展し來る作者の才筆は、其の根柢ある學殖と先例なき風格と相俟つて、騒壇注視の燒點となり、年ならずして居然たる大勢力となりぬ。げに漱石の面目は多様なり複雑なり。單純なる概括論を以て一刷毛に沐し去る事能はずと雖、其の間お自ら三様の異色を分つを得べし。『猫』『坊ちやん』に奇警なる觀察、銳利なる諷刺、氣品ある滑稽を具へたる英國趣味、江戸趣味の筆致を窺ふべく、『倫敦塔』『幻影の盾』『琴の空音』『薙露行』『趣味の遺傳』等に、富麗なる想像の翼を張つて空靈神秘の域に翔り、人をして幽玄沈痛の傳奇界に遊はしむる超現實的技巧を見るべく、『薙露行』『一夜』『草枕』等には、即ち縹緲たる一種の美感を讀者に起さしめ、暫く人生を忘れて或は典雅なる或は洒脫なる詩境に神往せしめんとする俳諧的態度の作風を認むべきなり。

『我輩は猫である』は、中學教師若沙彌先生の飼猫が、先生を中心として其の周圍に存する種々の人物及彼等が演ずる雑多の事件に對し、自己の觀察を物語るといふ脚色の下に、作者自らの感懷諷刺を披瀝せる者にして、從て事件の發展人物の性格等に關しては何等の統一せる趣向なく、言はゞ小説に非ず寫生文にもあらぬ一種

「我輩は猫である」

珍奇なる敘述文なり。而も動物の説話に假托して諷刺の文を行ふ一種の様式は決して漱石の獨創に非ず。我明治文壇に於ても既に二十年代逍遙が一寓意譚に此の結構を見たりき。然れども此の様式を活用して其の風味を十分に發揮し、且つ其の諷刺諧謔に清新卓越なる者あるは『猫』に於て始めて之を見る。夫れ滑稽諷刺の作の本邦文壇に存するや久し。明治に入りても前に新二得知あり後に綠雨あり、各一方の雄なりき。然れども彼等は畢竟前代戲作の繼承に過ぎず。漱石が日常偶發の事件に對して觀察を下すや、奇警銳利、骨を刺し髓を抉らすんば已まざると同時に、飄逸冲澹にして餘裕綽々たる者あり、洒脫にして諧謔を極むると同時に、沈痛にして一種の悲哀を帶ぶる者あり。泰西ユーモアの風骨を得て氣品高尚に、理路を説いて剖析細に入り、實境を寫して揮灑傲を穿ち、内容手法共に全然戲作の流風を擺脫せり。『坊ちやん』は『猫』と異なり、一の纏りたる小説的趣向を凝し、江戸趣味の眼を以て地方の人物事象を觀察したる者なれども、根ざす所の作風筆致は、即ち『猫』の類なり。されば是等の作の根柢に働く者は言ふまでもなく理智にして一切の事件に臨みて冷靜に觀察し、周密に説明し、事相の真核に觸れて理智に満足

を與へずんば已ます。従つて其の文章自由達意を旨とし、思想の流露する所に放任せる傾あり。

「薙露行」

『薙露行』の「薙露行」等の傳奇的作を見るに、雄勁簡淨の致を極め、理路の委曲心狀の詳細を述べ盡す事なくして、直に感想の眞髓を表白し來る。故に華麗豊艶の文辭を弄しながら些の弛廢なく、莊重幽玄の詞章を爲りながら些の冗漫なく、句々讀者の胸奥を衝いて強烈なる印象を留め、從來動もすれば緩漫贅長の謗を得たる明治の口語文の爲に萬丈の光焰を揚げ、斯道の一新生面を開きたり。作者が近英の文豪スチブソンに私淑せりと稱する者、蓋し此の文體を生み出すに至れる由來の久しきを知るべし。獨り文致に於て前條の作物と異なるのみならず、描寫の對象に於ても、彼の現實界なるに對して此は超現實界なり、ロマンチックの空想界なり。然り、神秘空靈の想像を逞うせりと雖、露伴の如く露骨なる理窟に墮せず、鏡花の如く無内容の幻怪に陥らず。思ふに犀利なる洞察の眼を以て人生を觀る、諷刺の中に悲哀あり、諧謔の裡に痛苦あるは洵に已むを得ざる所、而も暫く此の傷むべき人生の煩を避けて神往すべき別天地を覓め、即ち思を遠くロマンチックの

空想界に走するに至るは、是亦然るべき徑路ならずや。此の條に掲げし作品は正に是なり。

「草枕」

次に第三類の諸作も略右と同一なる人生觀の態度より出でし者にして、『薙露行』の一半面は唯美しき感じを讀者に起さしむるに在るが如く、『一夜』は唯一種の情調を催起すれば足るなり。『草枕』亦然り。就中『草枕』は一畫家の旅行記に托して、かの自然の風光を觀する態度を以て人間を見んとする寫生文的描寫を試みたる者、所謂非人情的觀察點より人事自然を寫して成功に近く、作者が筆端に磅礴せしめんと努めし一種の美しき情調は遺憾なく表はれたり。其の剖拆的筆致の微を穿ち細に入るは、『猫』趣味の遺傳に似たりと雖、談理窮らんとする時一轉して叙景の筆を著け、進んで抒情に移り又還りて談理に入る所、詩趣饒かに神韻浮動し、誠に渾融の作に近し。作者自ら曰く、斯かる作品は東西兩洋に其の類例を見ずと。然り此の作の獨創なるは根柢に横はる人生觀照の態度の特異なる點に存す。曩きに一たび傷むべき人生の煩を避けて傳奇的空想界に遊びし者、今は方向を轉じて非諧的態度に出で、一切の現實を超脱して傍觀の地位に立ち、悲痛に富める人生に

没頭せずして静かに之を薄布の彼方に押し隠す。人事の真相に突入して作者も共に泣くは普通の態度なり。斯くては可惜感興を殺ぐべし。思へらく、人生は退屈なり。執拗なり。觸れては例の人情に墮す。須く人情の外に立ちて美しき感興の中に生くべしと。故に此の類の作にはお自ら餘裕綽々として強く迫らざる趣あり。

斯くの如く漱石の作品には三様の異色を認むと雖、其の間相通する一道の光彩あり。到る所常識の影動き、哲理の閃きを見し、倫理の色を宿し、人生を傷むと雖極端に走りて虚無自暴に陥る事なく、諷刺辛辣を極むと雖執拗惡烈の弊に入らず。諧謔洒脱を盡すと雖蕩逸開放に流るゝ事なく、技業時に非常識に入り感情に榮え没道徳に繁らんとすれども、所詮常識の幹に據り智慧の土に立ち倫理の根に返る。一言にして之を覆へば大陸的特質に對する健全明快の英吉利的特質、西洋趣味に對する寡欲冲澹の東洋趣味、隨所に流露して獨得の光を放てり。されば佛國新派の流を汲める者の如き神經質的デカダンの世紀末的傾向、若しくは露國近代文學を學べる者の如き自棄的虚無的蕩逸的傾向は終に之を覓むる事能はず。自

然派象徴派の作品を読み終りて之に移れば、宛然別乾坤の觀あり。而して此の特徴は畢竟作者自身の人格より來る。作者思へらく進歩したる文藝は個性の偽らざる表現なりと。此の點に於て作者主觀の嚴肅なる表白を旨とする新興文學一般の流風と呼吸相通ふ事切なるを見るべし。

第六節 脚本界の新聲

脚本演劇の事を論ずるに方りて常に遭遭する一箇の困難あり。讀むべき文學としての脚本の發達を尋ぬる事と、劇場に實演せらるゝ脚本の推移を觀察する事と、常に同一歩調に出づる能はざる事是なり。劇場の實演は觀客其他種々實社會と直接の關係を有して、必しも文藝の理想に順應する能はず。其の進歩も發展も多くは實社會の進退措置に俟たざるべからず。故に新に現はるゝ脚本に在りても、上場せんが爲に書き御したる者と文藝の理想の上に立ちて作せる者とは等しなみに論ずべからざるに似たり。然れども前者必しも文藝の理想を無視する事難く、後者亦全く讀み物たるを以て甘するに非ざれば、兩者を別ち論ずるの複雑多

岐に陥るを避け、茲には唯文學の發達を大觀するの見地に立ちて新作の脚本を論じ、上場せると否との如きは暫く措て問はざるべし。是れ本書の例に従ふなり。先づ當時劇界全般の大勢を觀るに、かの團菊諸優の没後、舊劇は精神的死滅を遂げ、而も之に代るべき新劇未だ起らず、新派俳優新演劇といふ者も専ら小説物翻案物の上場に腐心するに止まり、俳優興業主の頭腦趣味素養依然として舊態に息し、未だ新興思潮に順應すべき新藝術を見ざりき。文學の新潮に對し絶大の影響を與へし泰西新文學も、此の社會に入りては反響極めて少く、斯界最新の趨勢を代表する翻案物も、僅に古典的なるシェイクスピアを模するのみにて、偶々『ド・デー』の『ツフオ』ペリコの『フランチェスカ』、マールリンクの『モンナワナ』、サルドーの『祖國』等の新劇を取る者ありと雖、其は唯盲目的に西洋物を取りしに止まり、意識的に新趣味を移植せんと試みしに非ず。三十九年以來大劇場設立の運動起り、俳優養成の計畫成り、女優輩出の機運を作りしも是等は寧ろ實社會の要求又は見識なき劇部の計畫に出で、未だ純粹なる文藝上の見地より新思潮の必然の所産として現はれしに非ざりき。

由來脚本は凡ての文學の中最後れたり。而して演劇は脚本よりも一層後れたり。『桐葉』の出現(二十九年)は既に新派小説に比して五六年の後れを見る。而も之を實演して多少の成功を收めしは更に八年の後(三十七年)なりき。今日に至りて『ハムレット』『エニスの商人』を歎ぶか如きは正に十年を後れたりと言ふべし。妄りに好脚本なきを歎する勿れ。今の俳優は現存の脚本すら満足に演じ遂ぐる者なきに非ずや。俳優の時勢に後るゝ事番に十年のみに非ざるなり。『イブセン』ハウプトマンを理解し實演し得る俳優の出づるは前途尙遠慮ならん。此の時に際し確たる文藝上の見地に立ちて劇壇革新の運動に着手せし者あり。文藝協會演藝部及毎日新聞社内の若葉會即ち所謂文士俳優の活動、佐藤紅綠、松居松葉の劇部に於ける事業是なり。文藝協會は早稻田大學の文科を中心とする文藝團體にして、三十九年抱月等によりて起され、最も力を演藝に盡し、同年及翌年二回の試演を行ひ、春曙鐵笛薇陽等『桐葉』『エニスの商人』『ハムレット』『新曲浦島』を演ず。就中春曙の公子ハムレットは卓絶なる藝術として斯界に認められぬ。若葉會に在りては、三十九年來、劇評家岡鬼太郎、杉廣阿彌等『日蓮上人』註說法(鵬外作)

「吉田寅次郎」「月郊」「薔破柴田」「紫紅」「信玄最後」(同)を演じ、専門家に非ざる文士研究の結果を公にせり。紅緑は三十九年來劇場作者として作劇に従事し、松葉は歐洲巡遊を終へて歸朝し、同じく外遊せる俳優左團次と結んで新界に革新を行はんとし、四十一年「娼婆と盛遠」「松葉」「エニヌの商人」「逍遙譯」を演じ、左團次の「シャイロック」に舊型を抛つて新工夫に就かんとする意氣を示しき。我が俳優の技倆は、斯くして漸うハムレット、シャイロックを演ずるに足る程度に進むを得たりしなり。

然れども是等の劇は吾人より之を見れば尙「忠臣蔵」と相距る事遠からず。現代人の胸臆を動かす新思潮と相關する所なきに似たり。畢竟將に來らんとする新演藝を導く先驅たるに過ぎず。脚本の如きも、進歩の程度到底小説と同一の談に非ざるなり。而して斯壇發展の斯くの如く遅々たるは、其の由る所一にして足らず。俗衆を以て過半数を占めらるゝ觀客と稱する者の向背は、演劇生存の第一要件なる事其の一なり。文學上何等の見識なく、唯演藝興行を以て己か營利事業とする劇場主興業者が、絶大の勢力を俳優の進退脚本の選擇の上に有する事其の二なり。興業主俳優其他劇部内面に於ける多年蓄積の情弊牢固拔くべからざる者

あり、俳優脚本家等にして偶々革新を企つる者ありとも、此の情弊の纏綿する所一厥復起つべからざる悲境に陥るに至る事其の三なり。俳優を始め劇部全體の趣味頭腦到底新文藝を理解し受用する能はず、所謂改良改革と稱する者遂に何等の新意義を齎さざる事其の四なり。所謂業土の統治すべからず、修すべからず。之を指導育成して新文藝を産み出さんが如きは、百年河清を俟つに等し。寧ろ之を拋棄して別に全然新しき者を建設せんに若かず。是に於てか從來の劇場を棄て、新試演場を建設し、從來の俳優を顧みずして新優人を養成し、從來の見巧者風の劇評家に依らずして新思潮に養はれたる新批評家に聞き、從來の脚本を改作續案する事に躊躇せずして新意義を有する新脚本を迎へんとする傾向漸く斯界に現はれぬ。げに逍遙の言へる如く、今は折衷の時代に非ずして創始の時代なり。所有舊套を排して人情自然の表白に歸るべき時代なり。第一節に説きし新フアンチシズムの思潮は此所にも其の發現を見るべきなり。

舊套破るべく、舊型壊つべし。而も舊演劇の中一種の藝術として新劇壇に生殘るべき唯一の技あり。振事又は所作事と稱する舞踊劇是なり。此の者や泰西樂

逍遙

劇と一味相通する所あり、且つ恰も室町時代の能樂の如く、時勢の大波に推流さるゝ事なくして能く百世の好尚を維ぎ得べき特質を具ふ。故に之を變化改良して一新面目を與ふるを得ば、以て新時代の詩的劇曲として鑒賞するに足るべし。『新曲浦島』『新曲赫哉姫』を作れる逍遙の努力は、此の見地より見れば極めて重要な意義を有す。爾來逍遙は益研究の歩を進め、『鉢かづき姫』四十年、『新曲初夢』四十一年、『新曲金毛狐』同等幾多の試験的述作を公にし、既に其の二三は試演を経たり。然れども此の新樂劇又は新振事劇はむしろ音樂舞踏に近く、人をして忘我の境に神遊せしむるを旨とする者にして、吾人の生活ライフにひたと相合して感せしめ考へしむべき性質の者に非ず。従つて最新思潮との交渉甚切ならず。若し夫れ史劇と社會劇とに至りては、所有過去の歴史を放棄して全然新建設によるに非ずば其の前途誠に危むに堪へたり。史劇社會劇に對する新時代の要求苟にすべからざるなり。

紫紅

史劇脚本は白星月郊等二三の新作ありしも、特に注目すべきものなく、山崎紫紅に至りて多少の新彩を見る。『七つ桔梗』(三十九年)の一幕物七篇、及其の後の數篇、

皆史的事實に寓せて新時代精神を現さんと試み、多く個性の發展自我の満足を主張せんとするに似たり。其の結構に於ても、主人公の運命が生死の境に窮れる一刹那を舞臺に取り、過去未來を包容せる大なる背景の中に主人公の境遇心理を描出する手法を用ひ、一新生面を斯界に開けり。斯くの如きは現時の俳優にては十分に消化演出する事を難んせんも、内容に於て最新思潮に觸るゝ所あるが故に、脚本としての發展は頗る刮目するに足る。唯紫紅の作には、未だ新興文學の傾向を具現したりと見ゆる者あらず。イブセンの社會劇が文壇に知られしより既に十年、其の翻譯を見しより既に五年、其の影響は寧ろ小説界に著しく、社會問題に觸れ解放せられたる新人を描ける新興文學の作風は近時斯壇の中心に大波瀾を捲起せりと雖、劇界の進歩は未だ之に動かさるゝ程度に至らず、脚本に於ても小説に於けるか如き強き感化を受けざりしに似たり。然れども三十九年イブセンの訃音傳はりし頃よりノラ、ブランド、オスワルド、レベッカ等の名頻りに提唱せられ、之に刺戟せられて多少其の趣を傳へし脚本漸く出でぬ。泡鳴の『燐の舌』(三十九年)、『斧の福松』(四十一年)、佐野天聲の『意志』、『大農』、『不死の誓』、『同』、『眞山青果の』、『第一人者』、『同』、『生

天聲

「大農」

れざりしならば「四十一年」等脚本としての價值及實演の上に於ける成功の如何は暫く之を措き、兎に角新彩を斯壇に寄與せる功没すべからず。

就中天聲の作は皆社會劇にして、紫紅の史劇に比すれば頗る近代的の情趣に富み、現代思想界の苦悶暗闘を具象化して強健なる個人意志の發展を主張する所、疑もなくイブセンの刺撃を見るべし。試みに「大農」の脚色思想を尋ぬるに、主人公は強烈なる個人思想を懐ける新人にして、宗教には基督教を奉じ、戦争に捕虜となりて恥とせず。事業には大陸式の大農主義を取り、以て、二の宮明神を奉じ、武士道を尙び固有の小農主義を守る父妹村民に反抗し、所有嘲笑憎惡と戦つて其の主張を貫徹し、遂に個人の權威自我の勝利を謳ふに至るといふを以て一篇の骨子となす。從來文學の主題となれる新舊思想の衝突は、此の作に於ては生活問題社會問題に觸れて著しく沈痛嚴肅の色を帯べる事、破戒と同一轍に出で、近代泰西の自然派戯曲家の徑路を踏んでハウプトマン等の跡を追へる觀あり。而も此の劇の主人公は「破戒」の主人公の如く消極的の薄弱なる人物に非ずして、積極的革命的なる自我の結塊なり。恰も「猫橋」の主人公の如く、又「人民の敵」「ブランド」の主人公の如

し。我が脚本は茲に至りて始めて小説と略同じ程度に於て新時代の面影を寫せりといふべし。よし其の作意に於ても臺詞に於ても幾多の缺點を存すとも、新社會劇として極めて重要な意義を有す。

青果
「第一人者」

恰も此の際雜誌「歌舞伎」にもイブセンを模せる社會劇を載せ、新進小説家、青果、亦峭刻の筆力を此の方面に揮へり。「第一人者」は同じくイブセンの面影を髣髴し得べき新悲劇にして、傳習の俗見と新人の思想との葛藤に想を構へ、「大農」の峻烈なしと雖、渾融の致お自ら備はり、「大農」の如く革命的ならずして寧ろ道德的なり。舞臺上の効果はとにかく、脚本界の新聲として亦推讃すべきなり。斯くの如くにして我等は四十一年の今日、漸く一般文學の趨勢に平行すべき一二の脚本を見るを得たり。然れども其の質に於ても又量に於ても未だ大に稱するに足らず。特に劇界に在りては夜は猶深くして容易に醒めざる觀あり。吾人は唯新代の大思潮が文學界の所有部面に革新の波を揚げつゝある現状を叙し得たるを以て満足せんすとす。

第九章 新興の文學

一、思想界の新潮

三十八年空前の國家的大闘争も其の終を告げ、十年の宿志茲に報いて光榮ある勝利の桂冠を戴くや、國運の進歩曩日の比に非ず。國民自覺の強固なる亦二十七八年の往時に超えたり。されば戦後の文學界は活氣縱横、前年來の沈澁を破り、幾多の新現象踵を接して起り、其の状恰も二十七八年戦役の後の如くにして而も一層の確固と充實とあり。三十九年『早稻田文學』再興せられ、『文章世界』發刊せられて、抱月、花袋、評論の筆を執り、『趣味』亦新刊せられて、新作家の誘掖に努め、其の他文藝雜誌の起る者相繼ぎ論壇の活氣茲に再び現はれ、和歌界に在りては、『舞姫』、『夢の華』の作者品子正に圓熟高華の調を出し、俳句界に在りては、從來文壇の一隅に限られたりし所謂俳趣味を擴充して、文界の中心に大影響を與へ、新體詩界に在りては、前年に起りし象徴詩、益世に行はれ、小説界に在りては、特に眩暈燥爛、或は自然派の先驅と言はる、『破戒』、『運命』を出し、或は俳諧派と言はる、『藻虛集』、『草枕』を出し、或

は獨創の新味を斯界に齎したる正宗白鳥を出し、或は天外の『ゴブーン』、『宙外の』、『月に立つ影』、『三葉亭の』、『其の面影』等、各趣を異にする長篇を出し、其の他、新進作家新作風の起る者十數にして止らず、演藝界に在りては、文藝協會成りて、劇壇の刷新を計り、大劇場設立の議熟し、脚本募集の舉起り、文士演劇略成功の緒に就きて、専門俳優に刺撃を與へ、樂苑會成りて、歌劇を本邦藝壇に移さんとし、評論界に在りては、自然主義論始めて盛に、思想界に在りては、自稱神佛の論あり、宗教文藝の交渉論あり、文藝道德の交渉論あり、總て人生觀上の主義論頻りに討究せられ、通じて之を見るに、新興の氣勢何れの方面にも滿ち充ちたり。正に是れ百花新芳を競ふ時、文壇多望の春なり。

然れども當時の思想界文學界は、戦勝に酔ひ太平を謳うて高歌亂舞するか如き空虚の者に非ずして、大戦終局を告げ人心漸く沈澁するに及び、國民がはたと面前に遭遇したるは、夢の如き樂境に非ずして、大負擔を雙肩にして苦闘すべき斷崖の上なりき。暫く耽りつゝありし、快き幻想より醒め來りて、一朝現實の苦きに遭會する者、誰か痛切なる哀感に觸れざらんや。況や文明の進歩は社會問題の複雑なる

交渉關係を惹起し、交通の發達は泰西諸國の社會狀態をして直に本邦に影響する所あらしめ、是に關する學者文人の論議創作は月を閱せずして我に渡來するをや。戦後の社會的大變動は、一として人生の嚴肅なるを思はしめざるなし。げに人生は嚴肅なり、遊戯に非ず。山鳥の尾の長々しき行列を作りて五十三驛を練り行ける悠遊大平の世は夢の如く去りぬ。憲法發布の何事なるかを解せずして唯めでたしと酔泣させし景氣よき世も亦夢の如く去りぬ。生活問題の壓迫は所有空想を打破して赤裸々に吾人の前に暴露し、人をして深刻なる人生の悲哀に觸れしめずんば已まず。所謂自我意識の發展、個人思想の發達は、右に列叙するか如き狀態に在りては免るべからざる自然の現象なり。此の際に於ける我が思想界は果して如何なる特質を帯ぶべきか。情緒偏重の詩的空想時代は既に去りて、理智の力著しく發達し、如何なる事物に對しても情緒の盲動を許さず、覺醒の眼常に開きて感濁する事少し。其の自我の念強きや、從來の思想が多く他人本位にして君父國家を中心とせりしに反し、言動總て自己を本位にし、自我の發展を求めて屢舊道德を破らんとす。曩に日清戦争に勝つや國民的大自覺を喚起せしも、日露戦争

に在りては戦勝に慣れてにや國民的自覺は前戦役の時程大ならざりき。却て世界特に歐洲大陸の思潮を受けて個人的自覺を喚び起しぬ。斯くて個人の覺醒は人生の觀察に異色を呈せしめ、一種痛切なる主觀の基彩を漲らしむ。三十四五年の當時、犄牛が豫言的高調を以て呼號せし狂隣時代の個人思想は、今に至りて確たる根柢を現代人の思想に据えぬ。

斯かる時勢に生れ斯かる思想に根ざせる我が文學の特性は、問はずして明なるべし。試みに之を列叙すれば、第一前期の文學は理想を戀うて得られざる現實の苦痛を描きしが、今期のは傳習の理想を抛つて現實の眞に就き、常住不變を戀ひし昔に反して變化ある刹那を喜ぶに至れり。第二嘗て觀念小説出現の當時既に自意識の發達するあり、人生を批評的に觀察して其の缺陷多き慘憺たる狀態に逢着し乃ちかの悲惨小説深刻小説の作風を起すに至りしが、今は其の傾向一層著しく熾烈なる自我意識が生活問題の活火に觸れて忽ち破壊的の人物を作り、虛無的の人物を作り、神經質の人物を作り、敗殘の人物を作り、デカゲン小説頽廢小説茲に起る。第三に逍遙紅葉時代の文學に在りては、作者と作物との間に多少の間隔あり、

作者は自己の経験せる事象を閉却して故らに材料を他の世界に求め、斯くぞ知り得たる所の者を説示し物語る如き態度に出でたりと雖、今の文學は作者が直接経験せる人生の一片を赤裸々に表白する者にて、作者と作物、事實と文學、二者の間分つべからざる密接の關係を有す。即ち今の文學は偽らざる自己の表現或は一人格の自然なる表現にして、換言すれば嚴肅なる主觀の所産なり。第四に從來の文學に在りては主として、靈の方面に筆を著け、肉の力の強大なる事實を描く事少かりしが、今は肉靈不二の説をなす者あり、官能尊重の論をなす者あり、所有生存慾は心靈と同等の勢力を以て文學に入り來れり。第五に從來の文學は興味中心の文學にして、唯感情に訴へ涙に訴へ、所謂小説的事件を糺れ求めて遊戯三昧の境に入らんとせしも、今の文學は運命を靜思して人生を感得せしむる者、理性に訴へてひたすら事象の眞を得んとす。嘗て『小説神髓』の時代に在りては、心理現象の表面を寫して満足し、天外に至りて之に生理の事實を加ふる迄に發達せしが、今は更に人性全般の事象を顧み、根柢に立入りて内面描寫を試みるに至りぬ。されば『藤栗毛』に興を催し涙を以て主眼とすと標榜せる小説に感涙を絞らし時代は夢と過ぎて、

嚴肅なる人生の眞實に觸れたる者に非ずば吾人を満足せしむる能はざるなり。所詮文學はもはや閑人の閑事業に非ず、人をして喜ばしむるに非ずして考へしむるなり。第六に前期寫實主義に比ぶれば、人生を觀る態度お自ら異なり、寫實主義に在りては人生と自己との間に或る距離を保ち、客觀的態度を以て之に對せしも今の文學に在りては自己の中に人生の全き相を見出で、價値の判斷なしに結構脚色なしに其の眞相を暴露す。寫實主義は客觀の事象を尊重し、之を全人生として取扱ふも、今の文學は自己が自然人生の事象に觸接して起す所の種々の曲折動搖を二の客觀的事實と見做して之を文學の對境となす。即ち自然人事と自己との渾融合體せる者を全人生として取扱ふ。今の文學が自己暴露の文學となり、問題提供の文學となり、無解決の文學となり、無脚色の文學となり、主客兩體融合の文學となるは是が爲なり。更に其の技巧に就て見るも、或は露骨なる描寫と言ひ、或は無飾藝術と言ひ、何れも誇張を避け粉飾を去り、曲げず偽らざる事象を平淡達意の文辭に寓せ、白描素寫、直に事實の裸體的表現をなさんとす。

上述の如き文壇の新傾向は、世に稱して自然主義と言へり。或は自然の名に拘

して單に之を客觀主義と解し、選擇せざる事象の寫眞的描寫をなす者と誤るあり。或は泰西文壇に於ける十九世紀後半の自然主義ナチュラリスムと異なるを難するあり。或は新傾向の一斑のみを擧げて全豹の價値を定めんとするありきと雖、我が新興文學は斯く一口に説き去らるべき單純なる者に非ず。傳統を有し歴史を有する一個文學上の大事實なり。上述の解説尙其の要を悉くすに至らざるを思ふ。蓋し自然主義は明に狂悖時代の新ロマンチズムより統を引く。梶牛等の新ロマンチズムは、硯友社一輩の舊文藝觀に對する新文藝觀にして、同時に儒教武士道等の舊人生觀に對する新人生觀なりき。而も舊文藝舊人生觀に對する破壊の運動を開始せしのみにて、未だ具體的に新文藝新人生觀を立するに及ばざりき。自然主義を標榜せる論客は其の後を承けて舊文藝破壊の運動を續け、長谷川天溪は『太陽』に據つて幻像の破壊を論じ、破理顯實を提唱し、泡鳴は『神秘的半獸主義』(二十九年)を著して肉心不二半靈半獸の人生即藝術主義を呼號し、花袋『文章世界』に據つて無理想無目的を標榜し、抱月『早稻田文學』に據つて新主義に美學上の根據を與へんとせり。時會々藤村獨歩漱石等新作家の舊風を擺脫せる創作あり、之を動機として論

天溪
泡鳴
花袋
抱月

壇俄に色めき、苟も文藝に従事する人々は争うて之に關する論議をなし、舊人生觀舊文藝觀の一切を破壊し盡さんとする運動猛烈を極めたり。梶牛等の豫言的運動は、今日始めて鮮明なる色彩と重要な意義を有せる一般的運動となれりと言ふべし。されば自然主義は、單に文藝上の新主義たるに止らずして、又人生觀上の新主義たり。此の主義や、所有傳習を破壊して後に起りし新自我の所生なれば、即ち解放せられたる新人の人生觀にして、物心合一肉靈一致、自己は唯全一體として存するのみ、心性は知に非ず、情意に非ず、又全一體として存するのみ、現實の外に理想なく、眞の外に善美なしと稱する一元的新見地に立てる者なり。

一、新興の小説

自然派文學は論議のみことごとしかりしも、未だ一世の矚目を値すべき創作を見ざりしが、四十年に至りて評壇に於ける此の主義の鼓吹者花袋、『隣室』、『少女病』、『蒲團』、『一兵卒』等を草し、所謂自然派小説の一片を世に示せり。『隣室』と『一兵卒』とは將に病沒せんとする礦夫と兵卒とを描きて、生理的壓迫の強烈なる苦痛が所有精神的心靈的努力を推倒し行く消息を寫し、『少女病』と『蒲團』とは、家庭に興味を

花袋

『蒲團』

失ひ新時代に非られんとする中年孤獨の感を叙して、之に伴ふ生理的衝動の歴し難き發作に及び、共に自意識の盛なる現代人の生活の悲哀に觸れ前章に舉げし『女教師』の統を繼ぎて更に一轉歩をなせり。特に『蒲團』は、作者の心的悶塞を客觀化して偽らざる自己の大膽なる表白を試み、作家と作品とが有機的に渾融すといふ自然派の態度を最よく代表する者にして、一篇の材料盡く作家を中心とする現存の事實に出づ。而して主人公の性格及行動にはお自ら磨すべからざる時代の影あり。此の點に於て、『蒲團』は、夥多の缺陷を有するに係らず新興自然派の最初の見本として見るに足るべし。

藤村

同年藤村『並木』の作あり、推移り行く時代の洪濤が遠慮なく舊人を倒して進む有様を描きて刻下中年の悲哀を名残なく現はし、獨歩『疲勞』、波の音『竹の木戸』等の作あり、些末平凡なる事實を描きて其の背景たる現代人生の大なる影を暗示し、例の鋭利峻削の筆を以て生の悲哀倦怠を痛切に寫し、風葉は『おど娘』、『解脱』等の短篇『天才』、『戀ざめ』等の長篇を出して『青春』以來益々時代の新潮に適應せんとする努力を示し、或は『蒲團』に見わたる如き中年の戀を描かんとし、或は壯年者の青年に對

風葉

『天才』

する嫉妬を寫さんとし、就中『天才』には倦怠と疲勞とに陥りたるデカダンの青年作家と生活の苦痛に壓迫せられながらも自意識の飽くまで強盛なる青年評論家とを中心として、現代文學者の生活の悲惨なる一面を刻劃に敘し、而も其の作風從來の爛熟なる技巧を破棄して白描素寫の新風を試み、秋聲は澁々として白濁を呑む如き筆致、寂寥にして沈鬱なる作風、未だ文壇に其の價值を認められず、從來唯一種深刻沈痛なる人生の半面を寫せる小説家として知らるゝのみなりしが、新興文學の文壇に迎へらるゝや、會々之に暗黙契合する所あり、俄然として世に知らるゝに至りぬ。此の點に於ては頗る獨歩の出處に似たり。其の北國的陰鬱の生活、心身上の劣等者が廢頽の生活を叙するに、獨得の寂しく沈みたる筆致を以てする所、露國文學と一味相通する點あり、『おのが縛』、『焰』、『獨り』、『犧牲』、『凋落』等の長短篇、何れも孤獨なる自我の寂しみを描き出で、徹底せる人生觀あり、人をして深く冥想せしむる力を具ふ。眞山青果は新進の作家にして、『南小泉村』に僻村の生活を描き、ツルゲネーフを想起せしむる筆致を以て一躍斯壇に名をなし、次で『敗北者』、『若荷畑』等の短篇をものし、力ある筆を以て多く疲れたる生活の哀愁に想を寄せたり。以上は

秋聲

『凋落』

青果

皆四十年花袋の諸作と同時に起りし現象にして、自然派の特色を發揮して新運動に寄與する所少からず。

然れども花袋等の作品は未だ全然舊風を擺脫せりと言ふべからず。「蒲團」の如きは、當時自然派作家の態度を具現せる者と稱せられたれども、尙センチメンタリズムの餘弊を殘し或は描かんとする窮竟事象を暴露するに急にして、概念的説明の筆を行ひ、自己客觀の態度未だ十分ならざる者あり。此の點に於て正宗白鳥は卓出せる新作家と稱せらる。白鳥は三十七年の頃始めて文壇に知られし新進にして、四十年より次年にかけて『塵埃』『獨立心』『安心』『玉突屋』『何處へ』『五月職』『世間並』『明日』等、即『紅塵』『何處へ』二集に收めたる短篇を草し、何れも自己經驗の上に材を求めて、些細平凡なる事象に全人生を暗示するが如き趣あり。彼の人生を觀るや無關心なり、冷靜なり、意識的なり、覺醒的なり。反抗するも甚しからず、憎惡するも極まるに至らず。好んで一切の刺戟に對して何等の興味を感ぜざる寂しき人生を描く。蓋し、チエホフに私淑する所最深きなり。而して其の描寫の態度は、唯示さんとする事象の生命を素朴なる筆致を以て其の儘に直寫するのみにして、決

白鳥

『紅塵』
『何處へ』

して之を説明註釋することなし。

自然派の創作は白鳥に至りて略成熟したる標本を得たり。此の時に際し、更に之に加へて新興文學の發展を示すべき二個の作品を得たり。花袋の『生』と藤村の『春』と是なり。『生』は作者の藝術に對する主張、即ちコンクールの態度を學んで、現實に於ける自己の經驗を唯印象のまゝに平面的に描寫し、而も事象其の物のみにて讀者をして自ら深く考ふる所あらしめんとの主張を實現せんと試みたる者にして、材を一家庭の親子兄弟の關係に取り、古葉凋落して新芽の發生する生の相を描き出でたり。之を讀めば人類各個が強固なる生の執着、親子兄弟と雖畢竟自己を本位として別々に各個の生を營むに努力する生の執着を窺ひ知ると同時に、大自然力の強壓が獸々の裡新陳代謝を行つて止まざる人生の全相を名殘なく味ふを得べし。『春』は作者が從來の技巧を棄て、自己生活の經驗を直寫するに印象的粗描を以てせんと試みたる者にして、雑誌『文學界』の同人が新思想新文藝を鼓吹せし時代、思想界の曙文藝界の春とも言ふべき時代を背景となし、此の運動に與りし若き人々の生活、即ち人生の春ともいふべき者を描出し、貫くに作者自身の生活

『生』

『春』

を以てせり。之を讀めば、嘗て人生を論じ戀愛を談じ、所有舊文藝を破壊し、所有傳習を打破せんとし、健闘の極途に時代の犠牲となりしに、ロマンチックの詩人北村透谷を中心とする精神的運動の消息お自ら思ひ浮べられ、ロマンチックの藝術生活と壓迫し來る實際生活との扞格に懊惱せし作者が青春時代の消息お自ら回想せらるべし。上掲三作品は、共に作者の舊風を擺脫し、自然派の自己客觀の態度印象的描寫の筆致を比較的よく表出せる者と稱せらる。

現時自然派の發展は大略茲に止まる。顧みて既出作品を通覽すれば、偽らざる自己の表現飾らざる眞實の描寫と稱する中にも、特に廢頽哀愁の一面に馳せ、獸性開放の一角に赴き、デカダン人物の一方にのみ行くの觀あり。何が故に然るか。或は曰く、こは其の師として學べる泰西文學其の物の傾向を模倣せしのみ。十九世紀大陸文學の自然派は、人生の現實を重んずるの極獸性を描くを避けず、自意識發達して個性を重んずるの極偏倚病的の人物を寫すを辭せず、實際生活を重んずるの極疲勞孤獨の生活を筆にするを拒まず。當時社會の實狀正に然りしが爲なり。加之彼の國特に佛露二國の實情は、迷信に囚へられ宗教に囚へられ社會的若

しくは政治的の壓制束縛を受くる事甚しきを以て、其の反動として虚無的反抗的肉病的的文藝を生じたるなりと。或は曰く、世曾に佛露文學の模倣のみ言はんや。我が國現時の社會狀態は正に斯かる文藝を起すべき素質を具ふ。曩に第三期初頭に方り、所謂深刻小説悲惨小説の行はれしは、洋々たる戰勝の歡樂の中、既に急激なる文明の進歩に伴ふ夥多の犠牲者を出したる當時の社會狀態の反映なりしが、今や我が文明の偏倚的進歩は、點々飛躍復往日の比に非ず、覺醒の眼に映する社會の現狀は疾痛すべき事象に滿ち、生活の實況は哀傷すべき葛藤に充てり。生の壓迫は個人をして自覺せしめ、傳習を打破せしめ、赤裸々の態度を以て人生に向はしむ。此の時に方り、眼前に曝露し來る現實の眞相を見ん者、悲哀痛苦の聲を放たざらんと欲するも能はざるなり。特に新生を翹望して一切の因襲を破らんとする時、其の事の容易ならざるを知り、或は舊習を破るも之に代るべき新人生の容易に實現し難きを見ては、誰か不安煩悶の聲を揚げざらん。透谷橋牛が十五年乃至七年以前に嘗めたりし苦悶の味が、今日遂に創作の形を以て現はれし事、偶然に非ず。且つ未だ嚴格なる過去社會の桎梏より開放せられしのみにて未だ新秩

序に訓練せられざる個人が、斯くの如く放縱懷疑に流るゝも亦已むを得ざるに出づ。思ふに、兩者各一面の理を闡明せるもの、生の痛苦は右今東西を通じて論らざる大事實なるべし。雖近時文明の爛熟は一層之れを切實ならしめたり。而も現代自意識の強烈なる個人は過去人物の如く遁世自殺を學ぶ能はず、飽くまで世に生きんとする願あり。茲に悲哀起りデカダン傾向生ず。自然派の作品が理論の廣汎雄大なるに似ず、相率ゐて破壊廢頽の一面にのみ趨せしは即ち是れが爲めなり。

新興文學の主要なる一面をなせる自然派小説に關する論述は茲に筆を擱き、轉じて他の一面なる俳諧派小説の發展を辿らん。右に敘べし、人生の真相は俳諧派作家も亦之を洞察して近代的哀愁を身にしむ。然れども之を觀照する態度若しくは之を文藝に表現する態度は全然自然派と趣を異にし、現實の眞を赤裸々に暴露するを避け、美しき薄布を隔て、之を觀んとす。故に回避的態度と言ふ。現實の事象に没頭熱中せず、冷靜に傍觀す。故に非熱情的態度といふ。冷靜に傍觀すと雖清澹溫藉の襟懷を存して一種の情味あり。故に微溫的態度と言ふ。事象の

外相に棄て難き逸興を感じて内部意義の深きに入らんとはせず。故に低徊的態度と言ふ。其の他或は非人情的と言ひ、或は大人對小兒的と言ふ者、若此の人生觀照若しくは文學製作の態度を指せるなり。されば此の作風に出でたる文學は多くは人生の奥底に達せずして所謂觸れぬ作品となる。然れども至精神を盲目的に傾注する事なく、理性の眼を開いて一段の高所より全局を瞰下すが故に、餘裕ある作品となる。作者の態度既に右の如くなれば、從て描寫の事象の意義内容に重きを置くよりは、寧ろ如何にして事象より得たる作者の感^じを表現せんかと言ふ事、即ち描寫の技巧に全力を注ぐ。事象の無脚色無結構を辭せざる所は自然派に似たりと雖、表現の技巧に腐心する所は全く之に反す。以上擧げ來りし俳諧派の特質は、即ち東洋趣味の特産にして、一たび俳句となり、二たび寫生文となり、三たび小説となりて斯かる發展を遂げしなり。子規が鼓吹せし俳的文藝の生命は、今に至りて明治文壇の中心に影響を與へたりといふべし。

虛子の『鷄頭』に收めたる短篇は、此の種小説の主要なる者にして、漱石の作品と共に此の派を代表す。然れども彼等の態度は、四十年に入りて著しく色調を變じ、主

「虛美人草」

觀的傾向を加へ、徹底的筆鋒を磨き、現實生活の内面に肉薄せんとする趣あり。即湫石の『虛美人草』は、全幅の苦心を文章に集め、沃艶の中お自ら薄命の韻を存する一種の感しを表現せんと試みし中にも、一味人生の根本に説き入らんとする風情あり。『野分』『坑夫』に至りては即ち嚴肅なる現實生活に觸れんと試みし者にして、『鶏頭』の二三篇亦此の傾向を帶ぶ。虚子の『俳諧師』は目下此傾向の最發展せる者にして、材を新俳句勃興當時の俳人の生活に取り、恰も『春』が『文學界』同人の運動を描きしが如く、日本派俳人の文學的運動を寫し、之を行るに印象的筆致を以てし、頗る近代的风趣に富む。『生』及『春』と並べて新興文學の一方の代表作とすべし。

「俳諧師」

二葉亭

二葉亭の創作『其の面影』三十九年、『平凡』四十年は、評壇の一部より自然派の作品を以て目せられ、作中人物の自意識強き事、人物及事象に現代人の生の悲哀お自ら現はるゝ事等を擧げて其の特色とせらる。然れども斯くの如きは新興文學の通性にして獨り自然派作品に限るに非ず。『其の面影』『平凡』の如き、若し類を以て別つべくんば寧ろ俳諧派の作品に近き所あり。試みに其の人生觀照の態度を見るに、人生を洞察して一段の高所より瞰下し世は畢竟斯かる者ぞと冷かに説示する趣

「其面影」

「平凡」

あり。即ち所謂非熱情的態度、大人對小兒的態度、餘裕ある態度なり。而も其の態度強きに過ぎて往々人生を侮り人物を弄ぶか如き弊に陥り、人生に對する嚴肅なる觀察、人物に對する温藉なる同情を缺き、動もすれば冷嘲惡諷に陥らんとする嫌あり。次に之を表現する技巧を見るに、精練優麗、老熟の極に達し、時に内容を離れて獨り其の妙を恣にせんとする。是れかの露骨描寫排技巧を主張する自然派との間に超ゆべからざる鴻溝を穿つ者と言ふべし。蓋し是等は決して世の讚稱する如き新興文學の佳什に非ず。往年の作『浮雲』の作風を追うて唯一歩を進めるに止まる。其の價値はむしろ絶妙なる技巧に在り。

小説の作家には尙小山内薫、小川未明、水野葉舟、其の他新進の青年甚多く、前期以來の新體詩人にして指を小説に染むる者亦少からず。女流作家も二三輩出するあり。其作風多少差異あれども、皆近代の色調を帶びて新興文學の特質を存す。斯く新興文學の榮に初むるや、從來の作風を改めざる者漸く凋落し、宙外に長篇、月に立つ影』の作あり、鏡花に『春畫』『草迷宮』等の作あり、さすが往年の筆力を墮さずと雖、遂に新代の好尚に適せざる觀あり。澁柿園の歴史小説は依然二流以下の讀者

に歡迎せらるれども、文運の大勢とは全然相關せず。

二、新興の詩歌

蘇つて新體詩界を觀れば、かの鋭敏なる官能神經に訴へ人生の荒廢痛苦を歌ふ佛國デカダン詩派の遺流を汲む者尙斯壇に榮々、其の先達有明は『有明集』の諸篇に於て其の最發達したる象徴詩歌の標本を示しぬ。然れども象徴詩は、畢竟一種の新技巧を詩界に導きし者なれば、詩の内容の進歩に對しては幾何の貢獻を爲しかば蓋し疑問に屬す。故に末流誤つて象徴の技巧を試みんが爲に象徴詩を作するの弊を生じ、甚しきは單純なる譬喩を以て象徴と思ひなすの謬りに陥る。勿論現代人の實際生活に觸るゝに至りしは、内容に於ける一進轉歩に相違なしと雖、象徴技巧の研究と晦澁難解の謗を免れんとする苦心とはお自ら内容に對する注意を壓倒せんとする傾あり。是に於てか内容の根本的革新を稱ふる者詩界に出でぬ。泡鳴即ち是なり。

先きに自然主義の人生觀藝術觀を發表せし泡鳴は、四十年に入りて之を詩歌に擴充し、自然主義的表象詩を提唱して、所謂苦悶詩又は内容的デカダン詩を作し

有明

泡鳴

「闇の盃」

ぬ。曰く、世に絶對なる者ある事なし。人は刹那々に於ける心的活動に生くべし。而も其は情意に非ず、知に非ず、心性全體刹那の活動なり。熱情のみなるは少年青年の事なり。センチメンタリズム、ロマンチズムの事なり。壯年の今は情熱知熱共に活動する熱想。あらざるべからず。全心刹那の燃燒は即ち人格なり、行為なり、詩なり。斯くして物靈合一肉心不二の藝術的妙境に至るを得べし。其の刹那の心境をさながらに表白せる者、之を自然主義的表象詩といふ。詩集「闇の盃」(四十一年)は、即ち此の刹那主義の人生觀を體現して知熱情熱同時に燃わたる心熱の面影を寫さんと試みたる者なり。要するに作者の所謂苦悶詩は、現代人の哀愁を湛へ自家の生活の告白をなせる點に思想上の新味を有す。之を大局より見れば、藝術界全般を革新せんとする自然主義の洪波が、今や新體詩界に寄せ來りしものと言べく、所有古典的詩歌及技巧的象徴詩に對する破壊運動の先聲と見るべし。されば泡鳴の詩論の如きも獨り詩歌に對する特殊の觀察に非ずして、普遍なる藝術觀なり。自然主義的表象の説は總ての文學に通すべし。泡鳴は之を詩界に導きて先づ内容革新の運動を起せるなり。

然れども此の運動は専ら詩の内容に關し、未だ新體詩といふ特殊の形式に關して特殊の考察をなすに至らざりき。内容の激變右の如きに際し、依然として舊様の詩語詩形を取る者、其の間豈扞格なくして終らんや。小説に於ける自然主義の運動は、内容を一變すると同時に其の表現の形式をも一變して全然新生の第一歩に復らしめぬ。新體詩亦遂に此の事なかるべからず。思ふに新體詩が濛濛晦澁の非難の下に讀者社會に敬遠せられたるや久し。詩歌界最發達すべき新文學たる新體詩が、文壇の大勢力たる能はずして少數の讀者にのみ鑒賞せられし事多年、象徴詩に至りて其の傾向の極點に達せり。當代の作家自らこゝに反省する所あり、各表現の技巧に種々の研究を試み、用語句法の上に種々の工夫を廻らし、如何にして、晦澁難解の域を脱せんかと腐心せりと雖、形式の彫琢愈細に入りて讀者の心胸に觸るゝ者却て失はれんとす。『有明集』の渾成を以てして尙此の缺點を免れざるなり。泡鳴に至りて詩の内容を一新せりと雖、尙同じく世に解せらるゝ事少く、其の他幾多青年詩人の努力ありきと雖、一として此の非難を解くに至らざりき。かくて新體詩は漸く文壇の中心より遠ざかり、新興文學が冲天の勢を以て世に布き

從來新界の一隅に潛みし寫生文すら文壇の中心に若干の影響を與へしに係らず、益、讀者社會と乖離せんとす。詩人は必ずしも其の新感想の一般社會に解せらるゝを要せずと稱すと雖、新體詩其の物の日に、文壇の中心に遠ざからんとするを見ては詩人たる者如何ぞ現狀に安すへけんや。而も從來彼等が試みし詩律詩形に關する所有試驗も、表現の技巧に就ての慘憺たる苦心も、内容一新の目覺しき努力も、遂に其の功なきを見ては深き懊惱と懷疑とに包まれざらんと欲するも得べからざるなり。

退いて新體詩が讀者に解せられざる理由を索むるに、或は思想の上に在り、或は表現の技巧の上に在り、或は用語措辭の上に在りて、必しも其の軌を一にせずと雖、苟も近代の思想と沒交渉なる舊代の人に非ざるよりは、現今の新體詩の歌はんとする思想を了解せざる事あらざるべし。讀者は其の内容の如何に想到するに先ち、早く其の用語措辭の晦澁に苦しむ、表現の技巧の難解に感興を失ふ。新體詩をして讀者界より遠ざからしむるは主として形式技巧の内容に添はざるに存す。剗那に流轉する現代人の心的活動の複雑なる印象を表現せんとするに方り、舊代人

の詩想を寫すに用ゐたる在來の詩語にのみ依らんとするは素より難事に屬す。詩技亦然り、詩形亦然り。内容の律調と言語の律調と相和せざるに至りては到底詩的効果を見る能はざるなり。自然主義的表象詩の運動も形式革新に及ばざれば其の全功を收め難し。用語に古語復活を試み、口語混入を試み、詩技に俗語體を取り、象徴を用ゐ、詩律に七五を八六に變へ五七を七七に更め、詩形にソネットを取り長短句を混ふるが如きは、畢竟末節に過ぎず。所有過去の形式を棄却して内容の中より流れ出づる自然の形式を取るに非ざれば此の困難を解決する能はざるなり。從來の詩人茲に思ひ到らず、其の苦心試練する所多く姑息に終る。吾人先きに本書第一版の結尾に於て、三十八年當時の詩界を論じて、暗中摸索各種の研究試験をなしつつ未だ安住する所なきに似たりと言ひ、更に將來を揣摩して「七五五七の詩律のなせる貢獻は西詩の想形を移植せる功績と共に過去詩壇の一大記念たりと雖之に著しき工夫を加ふるに非ざれば將來の好尚を維々に足らず」と言ひし者、今に至りて争ふべからざる事實として現れぬ。

舊文藝破壊の運動は遂に新體詩の形式に及びぬ。四十四年に入りて御風、早稻

田文學「詩界の根本的革新」を稱道して曰く、之を歴史に徴するに詩歌革新の第一聲は常に形式に對する内容の爆發なり。形式を破つて内容の流露せる作風は常に新き時代を創む。之を我が詩界の現狀に見るに、象徴主義と言ひ自然主義と言ひ革新の聲徒に高しと雖、改むる所言辭の末に止つて未だ根本的形式に及ばず。古典的西詩の詩形に則り奈良朝以來の詩律を繼承して作られたる「新體詩抄」の形式を踏襲し、外形先づ定まりて之に内容を適合せしめんと努むる弊套を承くる限りは、到底現代人の胸に觸るゝ事難し。詩界眞の革命は新體詩といふ者の歴史を全然棄却して我が情緒主觀さながらの形式を新に創り出づるに在り。先づ從來の用語を斥けて現代口語の絶待自由なる採用をなせ。次に從來の固定的外存的詩律を捨て、情緒主觀其物の律に従へよ。第三に古典的西詩に則れる行聯の制約を破りて絶待自由なる詩形を用ゐよ。要するに内より湧き出で、自ら形を成す詩歌發生の第一歩に歸れど。斯くの如きは當代詩人が正に思ひ及ぶべくして未だこゝに至らざりし所の者を大膽に道破せる說にして、詩界に於ける自然主義の主張は茲に始めて徹底するに至りき。

御風は續いて其の主張を創作に試み、絶待自由の詩形を以て新風味を歌へる象徴詩を草しぬ。但し口語を詩歌に用ゐるは決して今日に始まりしに非ず。既に美妙齋梅花道人嵯峨の屋の昔に存し、近くは泣菫林外有明雨情等の民謡體の詩にも亦存す。又過去の詩歌に於ける律格句法を棄て、散文的にする事も、既に透谷梅花に始まり、山獨歩を経て白星林外に至るまで屢試みられたりき。然れども是等は唯用語詩形の變化多様ならん事を求めし試験的述作に止まり、未だ内容を開放せんが爲に自ら起れる形式全部の根本的棄却に非ざりき。獨り片山孤村が三十八年獨乙の「神經質の文學」を紹介するに方り、デエメル、ホルツの小篇を口譯せる者は、絶待自由の形式に出で、恰も御風等の先聲をなすの感あり。而も是意識的革新運動に非ざりしが故に深く注目せらるゝ事なかりしが、御風等の作あるに至りて俄然斯壇の大勢を動かし、新進青年の作家をして競うて之に赴かしめぬ。同時に泡鳴はホイットマンの詩風を承けて從來の詩律即ち言語律(外形律)を捨てたる散文詩を草し、續いて其の詩見に従ふ自己表現に最適なる言語として現代語を取り、御風等と呼應して盛に破壊主張の筆を揮へり。世に稱して、或は口語詩、或は

散文詩、或は自由詩といふ。蓋し單に一特質を擧げたる便宜上の名稱のみ。拘すべからず。

先に小説に於ける自然主義の運動を説ける際、論議の普遍的壯觀あるに係らず、作品は多く其の一面を體現するに止れざる指摘せしが、此の現象は又新體詩にも之を見るを得。上述詩論の壯烈なる些の非難すべきなしと雖、試作する所多く印象的断片的詩技の一面面にのみ熱する傾向あり。思ふに現代人の主我的官能的現實的デカダンのなるや、情緒生活甚しく荒んで常に新なる刺激を求め、其の極遂に異常なる刺激を俟たずんば復感興を起さざるに至る。其の情緒主觀さながらの聲は、即ち刹那に流動する情緒の各瞬間に於ける最強き印象的表現なり。現時の新體詩が印象的断片的となれるは、小説に於ける傾向と同じく現代生活の實相より流れ来るに外ならず。特に櫻井天壇が獨逸的印象的自然主義を説きてホイットマン、アララン、ポーに源流を吸めるホルツ、デエメル、モムベルト等の詩風を紹介せるは之に對する有力なる暗示となり、短句錯落間歇的断片的の措辭によりて強烈なる印象を直下に叫び出さんとする印象詩の一流益々世に行はるに至れり。

名けて印象詩又は断片詩といふ。

新體詩目下の發展は略茲に止まる。一切の自己活動が渾一して其の高潮に達せる刹那、お自ら迸出する全人格の聲をば、思想律(内容律)を追ひ現代語もて寫せる新詩は、詠すべき詩又は讀むべき詩の境を脱して考ふべき詩の域に入れりと言ふべし。斯くて詩界の新現象は新體詩に於て最も著しく、他の詩歌即ち和歌俳句に於ては、同じく文壇の大勢に動かされて或は自己諷詠或は現實描寫等注目すべき變化發展なきに非ずと雖、之を新體詩に比ぶればむしろ受動的なるの觀あり。

文學史家に從へば、泰西近代文學は、十八世紀のクラシシズムより十九世紀のロマンチシズムに移り、レアリズム、ナチュラリズムに變じ、世紀末より二十世紀初頭に於てシムボリズムに轉じ、今やミシチシズムに遷らんとすと言ふ。本邦現時の文學は泰西文學に負ふ所少からずと雖、是等四五の流派一時に紹介せられ、星霜百年の間に傳統あり順序ある推移をなし、各種文學が僅々數年の中に順序なく系統なく輸入せられしが故に、最近文壇の變遷は必ずしも此の順序に依らず、上述各時

代が同時に來りしかの觀あり。且つ我が現時の文學や、假りに自然主義象徴主義印象主義と名づくも雖、固く是れ我が國民性に根ざし、我が社會狀態に養はれ、我が文學の歴史に培はれし者なれば、泰西文學に於ける同名の者と等しなみに觀んとする時は却て真相を失ふべし。故に泰西文學史上の事實を以て之を我が文學の現狀に推し、若しくは將來をトせんとするが如きは、勉めて避くべき事に屬す。我が詩壇の象徴派は必しも露佛のシムボリズムに等しからず。小説界の自然派は必しも純客觀科學的眞實を重んずる本來自然主義に非ずして、却て主觀抒情の傾ある佛の印象的自然主義若しくは獨の徹底的自然主義に似たる者多し。唯其の大勢に於て絶東の海表に立てる島帝國文學が、極西諸邦の文學と呼吸相通ふに至りし大發展を認むれば則ち足る。

蓋しこの新興の思潮は獨り文壇の事象に非ず。フオルケルト曰く十九世紀後半の思潮の中心は實際感なりと。哲學に於ては理論上の眞を發見するよりも經驗上の實に近かん事を欲し、道德に於ては道義の理想を建設するよりも人類生活の實況に重きを置き、藝術に於ては美の極致を發揮するよりも實際生活の描寫を勉

むるは即ち最近の潮流なり。思想界のプラグマチズムと言ひ、文藝界のナチュラリズムと言ひ、等しく此の源より出づる二の流に外ならず。我が文學は他の都面に先ちて世界の思潮に參するの光榮を荷へるなり。

新興思潮の運動は斯くして各種文學を根柢より蕩搖し到る所舊形を破壊し去れり。然り目下新運動の主なる事業は破壊なり。内容の進歩革新ありて既定の形式に制約せらるゝに堪へざるや、乃ち爆發して所有舊型を焼き盡さんとするは文學史上の常態にして、鷺見柳之助間貫一の徒一轉して關欽哉となり、再轉して竹中時雄となり、菅沼健次となり、岸本捨吉となりし今日、硯友社を中心としたる舊文學の破壊せらるゝはお自らなる運命に屬す。吾人は舊物の破壊を惜まず。今後の問題は唯破壊し去りたる荒廢の中に立ちて如何なる新文學の殿堂を築くかに在るのみ。紅葉没して茲に五年、從來の名作家にして時代の大濤に推し流さるゝ者少からず、維新以來最暗黒の文壇に立ちて明治文學の基礎を築きし先進の諸士は、道を新進に譲りて過去の幕裡に没しぬ。新進の作家評家は破壊すべき者を破壊すると同時に、先進の功業を追讃するに吝なるべからず。彼等の努力は先づ文

學の社會的地位を高めて之を社會各方面に分布せしめ、舊時代の戲作文藝を排して新趣味を開拓し、次に一代文壇の指導者となりて後進作家を援き、外邦文學を紹介して東西思潮の融合に資し、總て將來の新文學を醸成すべき素地を作るに勉めたり。彼等は未來文學の大光明に達せんが爲に暗中に奮闘せし過渡時代の勇士として長へに其の功績を録せらるべきなり。今や文學の社會に對する地位亦往時の比に非ず。三十四五年に於ける新ロマンチズムの運動は道學者教育者を以て周章動搖せしめ、三十九年には劇壇の常例を破りて文士演劇の成功を見、四十年には社會は獨歩眉山の死に對して政治界其他に於ける偉人の死と同等の注意を拂ひ、文部大臣は半公式に文學者を招きて文藝院設立の内談をなすに至りぬ。斯く一方に於て文藝と社會との交渉日に密に、他方に於て海外文學の輸入月に盛に、文運興隆の機正に至れり。かゝる時勢に際し、過去文學を破壊して立てる新文學者の責任は、二十年前に於ける先進諸家のそれと同日の談に非ず。吾人は此の重任を負へる現今及將來の文學者が、如何なる新殿堂を建設して先進の勳業に對せんとするかを見ん。

明治文學史終

明治文學の歴史は、その初期から終りに至るまで、常に社会の動向と密接な関係を保ち、その発展を遂げた。この歴史を振り返ると、その変遷の激しさを窺うことができる。初期には、西洋文學の輸入と模倣が主であったが、次第に日本の特色を帯び、独自の発展を遂げた。この過程には、多くの作家と批評家が活躍し、その功績は後世に受け継がれている。この歴史を振り返ると、その変遷の激しさを窺うことができる。初期には、西洋文學の輸入と模倣が主であったが、次第に日本の特色を帯び、独自の発展を遂げた。この過程には、多くの作家と批評家が活躍し、その功績は後世に受け継がれている。

明治文學年表

- 一月 假名垣魯文「假名讀八大傳」發兌
- 二月 柳川春三「中外新聞」發刊
- 三月 太政官「日誌」發刊
- 三月 五箇條御誓文を發せらる
- 四月 福地源一「那條野傳平」江湖南報」發刊
- 四月 岸田吟香「漢草」發刊
- 五月 昌平學校を復興す
- 八月 江戸を東京と改稱す
- 九月 明治と改元す
- 十月 東京遷都
- 明治二年
- 一月 宮中御會復興
- 二月 出版條例新聞條例を公布す
- 三月 府縣に小學校を設く
- 五月 開成所昌平校に出版取調所を設く
- 六月 開成所兵學校昌平校を合して大學校とす
- 八月 藩藩奉還
- 八月 福澤諭吉「世界國畫」

- 不詳 福澤「西洋事情」第二編
- 明治三年
- 一月 大教宣布の閣議せらる
- 九月 「公文」西洋通商條約「第一編」府下に中學校を設く
- 不詳 中村正直「西國立志編」
- 明治四年
- 三月 水村黒川「橘原編」發刊
- 三月 「横濱毎日新聞」發刊
- 四月 關篤輔等「新聞雜誌」發刊
- 五月 内田正雄「東地略」初編
- 六月 松文「安政樂鏡」
- 十二月 同人「胡瓜圖解」
- 不詳 同人「胡瓜圖解」
- 明治五年
- 二月 條野傳平「落合芳雄西田修助等」東京日々新聞」發刊
- 二月 福澤「學問の勸め」
- 二月 東京に女學校を起す
- 四月 東京に圖書館を開く
- 五月 萬享「譯語」八相俵文庫」五十九

六月 小西義敬等『郵便報知新聞』發刊
 七月 中村正直同人社を起す
 八月 『學制瑣布』
 十一月 始めて太陽曆を用ゆ
明治六年
 一月 春水『時代加賀實』四十編乃至四十五編
 四月 渡邊溫暉『伊蘇物語』
 五月 東京外國語學校を起す
 七月 森有禮等明六社を結ぶ
 十月 征韓論起る
 十二月 福地櫻痴官を辭して『日々新聞』に入る
 不詳 福澤『文字の教へ』
明治七年
 一月 板垣退助等民選議院設立の建議をなす
 二月 明六社『明六雜誌』(月二回)發刊
 四月 服部撫松『東京新報』(月一回)發刊
 九月 『朝野新聞』發刊成島柳北入社
 十一月 本野盛亨『實業新聞』發刊鈴木正雄入社
 不詳 柳北『柳橋新誌』
 四週『百一新論』
 羅馬字採用論起る

一月 『新聞雜誌』改題『東京新聞』
 三月 『洋々社談』發刊
 四月 松村春輔『復古夢物語』
 五月 芳澤等『平假名輸入新聞』發刊
 十一月 春輔『近世櫻田紀聞』
 不詳 魯文『假名讀新聞』を横濱に發刊す
 『新島襄西京に同志社を立つ』
 『明六雜誌』發刊
明治九年
 三月 春輔『春雨文庫』
 四月 撫松『東京新誌』發刊
 七月 同人社『同人社文學雜誌』發刊
明治十年
 一月 柳北『花月新誌』發刊
 二月 鹿兒島に反亂起る
 三月 野村文夫『國々珍聞』發刊
 『顯才新誌』發刊
 四月 大學校東京大學と改稱す

八月 第一回内閣勸業博覽會
 九月 鹿兒島反亂平定す
明治十一年
 四月 板垣等民權自由説を唱ふ
明治十二年
 一月 學士會院を設く
 村山龍平大阪に『大阪朝日新聞』發刊
 二月 『歌舞伎新報』發刊
 九月 教育令を公布す
 十二月 國會開設の請願書白出つ
 織田純一郎譯『花柳春話』坂上育英舎より發刊
明治十三年
 三月 『東京學士會院雜誌』發刊
 七月 東京大學文學科始めて卒業生を出す
 十月 『六合雜誌』發刊
明治十四年
 三月 中江兆臣『政理叢談』發刊
 『東洋學藝雜誌』發刊
 十月 國會開設の大詔發せらる
 板垣等自由黨を結ぶ

十一月 音楽取調掛編『小學唱歌集』初編
明治十五年
 三月 福澤『時事新報』發刊
 五月 外山、山井上巽軒矢田部尙全『新體詩抄』
 九月 第一回繪畫共進會
 十月 兆民譯『民約譯解』
 東京專門學校早稻田に起る
明治十六年
 一月 馬場辰猪『天賦人權論』
 『官報』發刊
 七月 兆民譯『維氏美學』
 十一月 矢野龍溪『經國美談』第一
 坪内逍遙譯『自由太刀余波鏡録』
明治十七年
 四月 角藤定憲大阪に壯士芝居を起す
 九月 藤田鳴鶴『文明東漸史』
 十一月 柳北死す四十八歳
 不詳 かなのくわい起る
明治十八年

三月 尾崎紅葉石橋思案山田美妙等親友社を結ぶ
 四月 遊藝小説神髓
 五月 同『當世養生氣質』第一
 十二月 官制改革内閣設置
 『鳴鶴閣』『櫻思談』
 『ローマ字會起』

明治十九年

一月 『反省雜誌』發刊
 三月 帝國大學令發布
 六月 私立明治學院創立
 九月 末廣鐵道『雪中梅』

明治二十年

二月 總宮藤『國民の友』發刊
 『哲學雜誌』發刊
 『鐵道花同黨』上卷
 須藤南翠『新粧之佳人』
 森葉『新日本の青年』
 學位令を公布す
 二葉亭四迷『浮雲』上卷
 美妙『以良郡女』發刊
 『出版月評』發刊

十月 東京音楽學校起る
 『美妙紅葉』新體詩選
 『榮東海散士』佳人の奇遇

明治二十一年

二月 二葉亭『浮雲』第二編
 四月 三宅雄二郎等『日本人』發刊
 『紅葉等』我樂多文庫發刊
 加藤弘之著作『伊藤介』學位令によりて博士を授けらる

六月 『東京朝日新聞』發刊
 『二葉亭』あひまき『國民の友』に出づ
 雜誌『文』發刊

七月 田邊花圃女史『戯の篇』
 八月 美妙『短篇集』夏木立
 小説雜誌『都の花』金港堂より發刊

十月 殿本善治『女學雜誌』發刊
 東京美術學校起る
 少年雜誌『少年園』發刊

十一月 小説雜誌『小説茶館』春陽堂より發刊
 狩野芳崖死す六十一歳
 『大阪毎日新聞』發刊

十二月 小説雜誌『大和錦』博文館より發刊
 不詳 末松青津『谷間の煙百合』

明治二十二年

一月 美妙『胡蝶』春の屋、細君、風軒譯『探偵ユーベ』『國民の友』附録に出づ
 矢崎睦峨の『屋』初戀『都の花』に
 小説雜誌『新小説』春陽堂より發刊
 憲法發布式舉行

二月 幸田露伴『露園々』都の花』に
 新聞『日本』發刊
 『我樂多文庫』改題『文庫』

三月 紅葉『二人比丘尼色懺悔』新著百種』第一
 高田半峰『美辭學』

四月 川上眉山『黃菊白菊』文庫』に
 舞庭雲村『むら竹』第一編
 森鷗外等譯詩、面影、北邸散士、流轉、國民の友』附録に
 美妙『いちご姫』二葉亭『浮雲』續篇『都の花』に

五月 露伴『風流佛』新著百種』第五
 東京專門學校文學科創立
 箕村『當世商人氣質』

九月 鷗外等『掃草紙』發刊
 歌舞伎座落成

十一月 廣津柳浪『殘菊』新著百種』第六
 繪齋雜誌『國華』發刊
 思軒『賢使者』

明治二十三年

一月 鷗外『舞姫』國民の友』に
 新島襄死す
 蘇峰『國民新聞』發刊
 『日本文學全集』刊行
 露伴短篇集『葉末集』
 宮崎湖處子『歸省』
 國學院創立
 露伴『一口飯』國民の友』に
 『紅葉』加藤枕『讀實』に
 教育勅語發布
 三上高津共著『日本文學史』
 帝國議會召集せらる
 『新小説』發刊

二月 『新小説』發刊

三月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

四月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

五月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

六月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

七月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

八月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

九月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

十月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

十一月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

十二月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

不詳 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

一月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

二月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

三月 殿谷健山人『これ丸』少年文學』第一
 南新三『鎌倉武士』新作十二番』第五
 中西梅花『新體梅花詩集』

五月 川上首次郎等新演劇「板垣退助」を演ず
田口卯吉雜誌「東海」發刊
原抱一庵「閣中政治家」榮芳十種「第五
中村正直死す
村上浪六「三ヶ月」
七月 紅葉「二人女房」都の花」に
八月 坪内逍遙等「早稻田文學」發刊
十月 齊藤綠雨「油地獄」
十二月 綠雨「かくれんぼ」文學世界「第六
不詳 露伴「新葉末集」

明治二十五年

七月 鷗外歸稿集「水沫集」
九月 露伴「五重塔」
十一月 正岡子規「日本」に俳句を始め
不詳 黒岩涙香「萬朝報」發刊
不詳 内田不知庵「文學」班」
探偵小説流行

明治二十六年

一月 古河默阿彌死す七十八歳
五月 北村透谷等雜誌「文學界」發刊
子規「懶祭遊屋俳話」

十月 逍遙「我國の史劇」早稻田文學」に
十二月 「二六新聞」發刊
蘇峰「吉田松蔭」
不詳 露伴「風流發塵」第一「龍舟」國會」に
不知庵「罪と罰」
民友社「十二文豪」發刊
博文館「世界文庫」發刊

明治二十七年

五月 透谷死す二十七歳
七月 清國と開戦す
十月 魯文死す六十六歳
不詳 逍遙史劇「桐一葉」早稻田文學」に
露伴「雨江雪」湖上の美人」

明治二十八年

一月 帝國文學會「帝國文學」發刊
雜誌「太陽」博文館より發刊
露伴「新浦島」國會」に
紅葉「不言不語」讀賣」に
不詳 小説雜誌「文學俱樂部」博文館より發刊
二月 外山正一「散文時」可兒大尉「帝國文學」に
四月 泉鏡花「夜行巡査」文學俱樂部」に
小杉天外「改良若殿」讀賣」に
清國と講和す

五月 柳浪「島嶼」文學俱樂部」に
後藤宙外「ありのすさび」早稻田文學」に
六月 武島羽衣新體詩「小夜帖」帝國文學」に
鏡花「外科室」文學俱樂部」に
八月 眉山「裏表」連「菫日記」國民の友」附録に
雜誌「文庫」發刊「少年閣」改題
外山上田中村「新體詩歌集」
九月 俳會秋聲會起る
樋口一葉「濁江」文學俱樂部」に
十月 江見水陸「女房殺し」文學俱樂部」に
一葉「たけくらべ」文學界」に
十一月 櫻痴脚本「豊島嵐」
眉山「暗潮」讀賣」に
南新二死す
十二月 「文學俱樂部」増刊「國秀小説」

明治二十九年

一月 鷗外「めさし草」發刊「掃草紙」改題
露伴「比沼山の歌」帝國文學」太陽」
逍遙史劇「牧の方」早稻田文學」に
紅葉「多情多恨」讀賣」に
「文學俱樂部」増刊「青年小説」
若松睡子死す三十二歳
綾鷹死す四十九歳

四月 音樂學校第一回演奏會
六月 村井建資「日の出島」報知新聞」に
小説雜誌「新小説」再興
七月 柳浪「今月心中」文學俱樂部」に
竹越三又「世界之日本」發刊
八月 與謝野鐵幹詩歌集「東西南北」
新詩雜誌「大和琴」發刊
柳浪「河内屋」新小説」に
九月 小説風葉「庭白粉」文學俱樂部」に
十月 宙外「闇の現」新小説」に
十一月 「二葉亭」片戀」
一葉死す二十七歳

明治三十年

一月 紅葉「金色夜叉」讀賣」に
「一葉全集」
睡子「小公子」
雨江羽衣桂月新詩文集「花紅葉」
島崎藤村新體詩「天馬」文學界」に
美妙新體詩「覺界天女」大和琴」に
藤村「深林の逍遙」帝國文學」に
新體詩集「の花」

四月 宙外天外等『新著月刊』發行
土井晚翠新體詩『破鏡の響』『帝國文學』に
櫻痴歌舞伎座立作者となる
二葉亭『浮草』『太陽』
獨歩花袋國男湖邊子等『抒情詩』
天遊天來詩集『松虫鈴虫』
雜誌『日本主義』發行
關外喜美子譯稿集『かげ草』
藤村詩集『若菜集』
道遠『香子』島孤城落月『新小説』に
京都帝國大學設立
思軒死す三十七歳

明治三十一年

二月 『舞伴』二日物語『文藝俱樂部』に
子規和歌論『日本』に
管庵『暮の二十八日』『新著月刊』に
日本派俳句集『新俳句』
竹柏園和歌雜詩『心の花』發行
晚翠『暮』『帝國文學』に
『新著月刊』發行
藤村詩文集『一葉舟』
『國民の友』發行

三月 『管庵』暮の二十八日『新著月刊』に
三月 『日本派俳句集』新俳句
四月 『竹柏園和歌雜詩』心の花發行
四月 『晚翠』暮『帝國文學』に
六月 『新著月刊』發行
八月 『藤村詩文集』一葉舟
八月 『國民の友』發行

十月 『日本派俳諧』はこゝきす發行
『早稻田文學』發行
藤村詩集『夏草』
風葉『戀慕流』發行

不詳 風葉『戀慕流』發行

明治三十二年

一月 徳富蘆花『不如歸』『國民新聞』に
『反省雜誌』改題『中央公論』
高山樗牛『時代精神論』『太陽』に
中村雪後死す三十三歳
高等女學校令實業學校令發布
晚翠詩集『天地有情』
矢田部尙今死す四十九歳
私立學校令發布
菊池幽芳『己が罪』『大阪毎日』に
薄田泣菫詩集『暮留集』
子規寫生文『はこゝきす』に
鏡花『湯島隨』

明治三十三年

一月 『雜詩』歌舞伎發行
芳賀矢二『國文學史十論』
稅所敦子死す七十六歳

二月

三月 外山、山死す五十三歳
高安月郊詩文集『金字塔』
鐵幹詩歌雜詩『明星』發行
宙外、田園生活論『新小説』に
清國義和團の起るる
清國事變平定す
天外『初姿』
大西操山死す三十七歳

明治三十四年

一月 樗牛『文明批評家としての文學者』『太陽』に
ニイチエ論起る
河井醉茗詩集『無弦弓』
清澤藩之宗教雜詩『精神界』發行
福澤諭吉死す
國木田獨歩短篇集『武蔵野』
日本派俳句集『春夏秋冬』
晚翠詩集『晚鐘』
鏡花『思出の記』
大橋乙羽死す三十三歳
藤村詩集『落梅集』
樗牛『美的生活論』『太陽』に
泣菫詩集『行く春』

二月 二月 『日本派俳句集』新俳句
二月 『竹柏園和歌雜詩』心の花發行
二月 『晚翠』暮『帝國文學』に
六月 『新著月刊』發行
八月 『藤村詩文集』一葉舟
八月 『國民の友』發行

十二月 北田瀧氷小説集『瀧氷遺稿』
柳川春葉『錦木』『新小説』に
上田柳村譯文集『みなつくし』
兆民死す

不詳 風島子歌集『亂れ髪』
鏡花『高野聖』『新小説』に
月郊譯『イブセンの社會劇』

明治三十五年

一月 天外『ばり唄』
樗牛『日蓮論』『太陽』に
網島梁川『宗教的眞理の性質』『早稻田學報』に
篠野探菊死す七十二歳
雜誌『文藝界』金港堂より發行
子規『續祭禮屋俳句帖抄』上巻
風葉『涼炎』『新小説』に
田山花袋『重右衛門の最後』
徳田秋聲『春光』『文藝界』に
子規死す三十六歳
關外譯『即興詩人』
蘆花『黒潮』『國民新聞』に
透谷集『透谷全集』
永井荷風『地獄之花』

三月 三月 『北田瀧氷小説集』瀧氷遺稿
三月 『柳川春葉』錦木『新小説』に
三月 『上田柳村譯文集』みなつくし
三月 『兆民死す』
三月 『風島子歌集』亂れ髪
三月 『鏡花』高野聖『新小説』に
三月 『月郊譯』イブセンの社會劇
三月 『天外』ばり唄
三月 『樗牛』日蓮論『太陽』に
三月 『網島梁川』宗教的眞理の性質『早稻田學報』に
三月 『篠野探菊死す七十二歳』
三月 『雜誌』文藝界『金港堂より發行』
三月 『子規』續祭禮屋俳句帖抄『上巻』
三月 『風葉』涼炎『新小説』に
三月 『田山花袋』重右衛門の最後
三月 『徳田秋聲』春光『文藝界』に
三月 『子規死す三十六歳』
三月 『關外譯』即興詩人
三月 『蘆花』黒潮『國民新聞』に
三月 『透谷集』透谷全集
三月 『永井荷風』地獄之花

十二月
不詳

櫻牛死す三十三歳
涙香露、噫無情、萬朝報

明治三十六年

鷗外脚本「玉匣兩浦島」

紅葉「新撰金色夜叉」新小説に

月郊脚本「大鹽平八郎」

水陸勸業「オセロ」新派劇に上る

天外「宛風戀風」讀賣に

俳優尾上菊五郎死す六十歳

抱一庵「聖人歎嗟賦」

平木白星詩集「日本國歌」

專門學校令發布

「不如歸」新派劇に上る

月郊脚本「江戸城明渡」

長田秋濤「梅姫」

蒲原有明詩集「獨枝哀歌」

清濁滿之死す

十千萬堂出版社を起さんとし

對露開戦論起る

音樂學校歌劇「オルフォーニス」を演ず

露伴「天打つ浪」讀賣に

子規四方太等「寫生文集」

俳優市川團十郎死す六十六歳

十月

紅葉死す三十七歳

木村鷹太郎「フレーション全集」第一

「土井春晴勸業」ハムレット」新派劇に上る

詩歌雜誌「白百合」創刊

紅葉「鐘樓守」

鏡花「風流線」國民に

落合直文死す四十三歳

明治三十七年

「紅葉全集」第一

「櫻牛全集」第一

兒玉花外「花外詩集」

藤村小説「水彩畫家」新小説に

老風堂水機死す八十二歳

雜誌「時代思潮」發刊

露國と開戦す

露伴長詩「出處」讀賣に

「桐一葉」舊劇に上る

鷗外脚本「日蓮上人辻脱法」

終雨死す

木下尚江小説「火の柱」

抱一庵「巴里の秘密」

抱一庵死す三十九歳

俳優市川左團次死す六十三歳

九月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

一月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

一月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

一月

十二月

十一月

十月

九月

八月

小泉八雲死す五十四歳
登張竹風露「賣國奴」
道遠「新樂劇論」新曲浦島
子規歌集「竹の里歌」
岩野泡鳴詩集「夕潮」
明治三十八年
夏目漱石「倫敦塔」帝國文學に
塚原達雄歴史小説「日々に」連載せらる
漱石「我輩は猫である」ほこりきすに
尙江「良人の自白」
風葉「青春」讀賣に
前田林外詩集「夏花少女」
奉天大戦争
「牧の方」舊派劇に演ぜらる
魯庵「復活」日本に
田口鼎軒死す
泣菫詩集「二十五粒」
梁川「見神の實驗」新人
野口寧齋死す
日本海大海戦
泡鳴詩集「悲戀悲歌」
有明詩集「春鳥集」
伊藤證信宗教雜誌「無我の愛」發刊

七月
梁川「梁川文集」
獨歩「獨歩集」
落合直文「秋之家遺稿」
戸澤姑射「淺野靈巖」沙翁全集「第一」
柳村「柳村詩集」
梁川「梁川集」病問錄
藤岡作太郎「國文學全史」平安朝篇
露國と和す
明治三十九年
「早稻田文學」再興
品子歌集「舞臺」
櫻痴死す六十六歳
文學協會成る
藤村「破戒」
獨歩短篇集「運命」
街外「月に立つ影」日々に
天外「コアシ」讀賣に
高濱虚子坂本四方太寫生文集「帆立貝」
雜誌「文章世界」發刊
漱石短篇集「漆塗集」
泣菫詩集「白羊宮」
木村鷹太郎「フレーション全集」第二

六月 落合秋の家歌集
 晩翠詩集 東海遊子吟
 あやめ會詩集 あやめ草
 泡鳴論文 神秘的牛歌主義
 雜誌 趣味 發刊
 樂苑會第一回歌劇演奏會
 九月 漱石 草枕 新小説
 山崎紫紅脚本集 七つ桔梗
 青野 夏の夢 日本の面影 青英會發刊
 日本エッセイラント協會成る
 京都文科大學開講す
 十月 二葉亭 其の面影 東京朝日に
 秋聲 已の縛 萬朝報に
 晶子歌集 夢の華
 十一月 文藝協會演劇部第一回公試演
 毎日新聞社演劇團第一回公演
 十二月 大劇場設立の議起る
 岩城準太郎 明治文學史 青英會發刊
 明治四十年
 『日本人』改題『日本及日本人』
 漱石集 彌龍
 藤村短篇集 綠葉集

二月 正宗白鳥 塵埃と趣味
 三月 秋聲 烟と國民
 四月 風葉 天才 萬朝報
 五月 佐野天聲 脚本 意志 早稻田文學
 『思軒全集』第一
 獨歩短篇集 海聲
 眞山青果 南小泉村 新潮
 天聲 大鹿 都新聞
 六月 漱石 虞美人草 朝日新聞
 春葉 春葉集
 七月 花袋 蒲團 新小説
 八月 梁川 死す三十六歳
 九月 陸羯南 死す五十一歳
 白鳥集 紅塵
 十月 青果 脚本 第一人者 中央公論
 秋聲 湖濱 讀賣
 文部省主催第一回公設美術展覽會
 風葉 戀せめ 日本
 十一月 二葉亭 平凡 朝日
 文藝協會第二回演藝會に春曙ハムレットを演ず
 十二月 青果 青果集

讀賣新聞所載批評

明治文學史を讀む 藤岡東圃

この頃、岩城準太郎氏の明治文學史を讀む、恍としてわが半生の縮
 圖に接するの思あり。われらが古代文藝の變遷を學ぶも、既に消
 滅して跡なき過去の事實として、これを見るにあらず、その源流が
 今日文藝の海に流れ入りて、如何の波瀾を起し、何を究むること
 るに、興味あり、外國の歴史を學ぶも、これをわが國に比較し、わが
 文化と交渉するところを知るによりて、忘我の感あるなり。わけ
 て現代わが國文藝の歴史に接するや、書中の軼事はわが自ら経験
 せしところ、その聲は即ち讀者自身の歴史といふべきものなれば、
 感興の殊更に深きは、勿論の事なり。わがまだ十代の幼き頃、北國
 の冬の夜、雨月に吹きつくら吹雪の音をよそに聞きて、炬燵の中に
 『雪中梅』や『養生氣質』を讀みしこと、更に數年を経て、『色懺悔』や
 『風流佛』を讀みて、若き心にわれも何か書き試みんと紙を汚し、之
 ら、その後、東京に出下り、は、漸う悪口も覺えて、同窓の人と新體詩
 はどうの、俳句はどうのと言ひ合ひしことなど、今この書を見るに
 つけ、走馬燈の如く一時に胸の中に撥り走りて、三十餘年のわが生
 活は唯一睡の夢にも似たるかな。
 明治歴史全集編纂の企あるや、井上博士手に囑して、その美術史の
 一半を擔當せしむ、されし予、これに従はず。今日の繪畫彫刻の情態

を調査することの、馬鹿らしく思はれたればなり。狂人に従つて不
 狂人も走る如く感ぜられたればなり。時代の障子に隔てられて、古
 代を崇拜するは、排斥すべき宿弊にして、むしろ現代の作家を推奨
 し、將來の發達を計るべきことは、予さきに帝國文學誌上に、新作
 の尊重と題して述ぶるところありき。されど白狀すれば、これは
 わが理論なり、進歩の側には保守の影あり、現代のを推重するはわ
 が理性にして、これを輕視するはわが感情なり、わが胸中には二者
 の衝突常に絶えず。今日の美術界を見るに、大家といふもの、積極
 的にその實力に依らずして、消極的に既得の名譽を墜さざらんこ
 そな力め、また子孫の計に汲々たるに、青年はた、利を趁つて浮華
 輕薄に流るゝが、おしなべての習にて、刻苦勉勵、他を顧みざるも
 のは何處にか、求むべき。かくの如き社會を對象として、その歴
 史を編むことも、終に紙上に同情の念の湧くことなし、かくして如何
 ぞ自ら足れりとする著作を得べきや。これわが辭退の第一の理由
 なりき。これを文學に見るに頗る趣を異にするが如しといへども、
 來て見れば聞くより低し富士の山、なほ時代に關する偏見は、誰に
 も有りがちなことなるべし。然るに岩城氏の文學史は、わが難し
 とするところを難しとせず、濟々たる諸家の作物を精細に剖析批
 判して、しかも油然として同情の溢るゝを見る、これまづ予が本書
 に對して敬慕措く能はざる所以なり。
 本書は時代を三期に分つ。最初十餘年を世人が物質文明の發達に
 のみ腐心せる、文學の暗黒時代なりとし、春の屋の『養生氣質』と

「小説神髓」に新文學は開けて、美妙齋、紅葉、露伴の名聲噴々たるを第二期とし、一葉、柳浪、天外、及び紅葉門下の高足鏡花、風葉等の新進作家が輩出したるを、第三期とし、漱石、藤村等が文壇第一の地位を占むる最近の事情は、未だ敘述するに及ばずして筆を縮ぶ。區別極めて極端、時代の推移を熱察するに、變遷の跡のつからぬ如くなるべし。されどなほ隨を得て獨を望むの念を述べしめば、作家個々の作品を列れて、これを論ずること、稍煩瑣に過ぎ、一般文學社會の形勢に至りては、既くこ却つて委しからず、文壇大體の狀態を知らんことを欲するものは、茫然として把握に苦しむることなきや。第二期は國會も將に開けんとし、百餘萬物の進歩に格に就く時、文學が積極的に洋々たる希望の滿ちたるも、固より然るべきことなり。第三期に至りて、日清戦争の大捷あり、國民の勢力も漸次に増加す、されど文學にはなほ社會の暗黒面を見、悲慘なる人生を寫すもの多きは何故ぞ、これは古代の文學が佛教の影響を受けて歴世的になりたるが如く、また西洋文學に感服して、其筆を深刻にせんことを力めたる所以に止るや、或は當時の社會の情態は十年前の希望の如くなるが上、新舊風俗思想の衝突漸く表面に現はれて、此結果を生じたるか、邊谷、藤雨、一葉等の實歴もこれに伴うて注意すべき事件なるべし。著者はまた浪六、弦外をも脱く、されどこれを脱くに當りては、徳川時代の宿弊たりし階級制度が明治に至りて放擲せられながらも、なほ文學の讀者に或る階級の存在を暗示せざるべからず。題目選擇の

變遷、史傳の流行と純文學との關係、樗牛を中心とする文學批評と創作との關係等の如きは、明治の文學を評論するに當りてまた須要の條件たるべし。されど注文は易く、實行は難し、漫りにこれら條目を列ねるは、備はらんことを、一人に求むるもの、予みづから數年の研鑽を経て能くこれを爲さんかと思はれるれば、惶惶として答ふることを能はざらん。

從來、明治文學の歴史といふべきもの、二なきにあらざらんといふに足らず、立派に歴史と稱すべきは、此書を始めます。早稲田文學の叢報などもその資料として最も有益なるものなるべきが、組織的に一書に纏めて明治文化史の最要なる一部を成就せる著者の功は多きすべし。本書は著者の處女作なり、明治歴史全集の第一巻なり、此好者を得て、予は多望なる彼此の前途を祝せざるを得ず。(二月二日、大磯にて)

現代文學の意義を論じて
「明治文學史」を評す(東亞之光)

志田素琴

丁未新春の曙光と先を争ふて、岩城文學士の「明治文學史」を見るの感あり(同題同部同僚同科) 岩城君は予の朋友なり、同輩十年而かも其半は、中學に在りし頃より現代文學に多大の趣味を有し、金城に出て、其好致へす、傍ら新體詩俳句等の創作を試み、共に北聲會に加入し、榮影先生の指教を受けし事あり、轉じて東都に出ず

るや、新舊就讀往年の如くならず、寧ろ古文學並に泰西文學の研鑽に忙しかりし、往年の嗜好は未だ必らずしも渝らず、母校を卒業して任に離波育英の事に趣くや、遂に帝國文學に寄せたる論文並に新體詩は、君が在學中或は卒業後の研鑽並に觀察の消息の溢るゝものありき、事なる必す漸あり、君が過般の好者なりしもの、決して一朝一夕の所以に非ず。

予は「明治文學史」に對する所感を、述ぶる前に、少しく現代文學史の意義に就而稽へんことを欲す。去にし三十七年二月帝國文學第二回講演會に於て、大村先生の、以下の如く演へられし事を記憶す。

獨逸國の大學には、現代文學講義といふ一つの講座が設けられてある、伯林大學では、ヘルマン博士が此講座を擔任して居る、而して現代に於ける詩人の著名なる「ドラーマー」は、一々之を學生の前に於て批評して、嚴正なる意見を發表して居る、此講義は中々面白いもので、聽講者極めて多い

從て獨逸に於ては現代文學史の刊行せらるゝものも決して尠少なからず、我國現代の事情、未だ大學に現代文學の講座開設を見るに至らずと雖も、近き將來に於て之を實にするの暇必ず到達すべき時論を俟たず、而して頓ては講壇に於ても演へらるべきもの、先づ文學を成りて現はれしもの、是れ即ち岩城君の現代文學史たるなり

抑も現代文學史の第一の價值は、既に芳賀博士の序文に指示せられし如く、現代文學を現今の人の手に敘述し詳論せる所にあり、言

ひ交ふれば後代より看し其史實の正確に可能の莫大なる所にあり、之に對する興味は無地なる所にあり、是れ現代文學史の第一義なるべし、特に我國現時の文運の情勢は如何、井上博士が其序文に於ける「維新以來の大變化は、實に大變化といふのみならず、又同時に大進歩なる大發展なり、斯の如き大發展大進歩を齎したる大變化は、世界の歴史に於てすら、尙且つ、其類例を發見する事能はず、歐米の學者或は以て一種の奇跡とみなすもの、亦以なきにあらざるなり、と稱へられし如く、其進歩發展の情勢、實に其人力なるかを疑はしむるものあり、固より時代の大勢に於ては尙過渡期たることを免れずといへども、而かも前後四十年の過程に於て而行ひ得たる大進歩大發展は、僅に之を編述し詳論すべき價值を有して余あり。

案より文學の如き精神文明は、恒に一歩物質的文明に、後るゝを以て常規とすも、君が書中に敘述せられし所を以て見れば、明治文學の過去四十年の歴史が、如何に價值ある頁を綴り來りしかに、今更らるゝ如く一驚を喚せしんば非ず。

現代文學史は以上の如く特殊の意義を有すと共に、其歴史たるの點に於て、歴史としての一般の意義をも具へざるべからず、夫れ歴史の過去を知る所以のものは、頓て未來をトセしめんとするに外ならず、温古知新て非常套語は、其餘りに常套なると共に、又不易の眞理たるなり。人は何によりて其理想を建設せんとするか、其希望を確立せんとするか、謂ふまでもなく我が有する過去の歴史な

るべし、理想に憧れ希望に燃ゆる青年が、偉人豪傑の傳記に多大の興味を有するが如きは、此の事實の最顯著なる反映にあらずや。こは概説すべく余りに明白なる事實なり。而かも世助すれば崇古に傾いて現代を蔑如し、古物を尊重して新作を賤視せんこと、特に我國現時の藝苑に於て、此病弊の存するものあり、崇古必すしも悪しきに非ず、然れ共新作の價值を知らざるが如きは不具の見のみ、歴史は畢竟、未來に建設すべき基礎たることを知らば、崇むるも共に今を學ばざるべからず、帝國文學に出でたる、藤岡博士の「新」の尊重は、此迷蕙を喚び醒せる曉鐘ならんやせんや、兎に角以上の意味に於ける歴史は、一種の撰言者なり、而して普通の歴史に於ては、多く過去のみを説きて現代を説かず、従つて事直接に、目前の事件現在の人に關せずと雖、現代史は過去と現代との交渉を説くと共に、主として現前的事實、現存の人の對象とするを以て、直接に其實其人に對して、注意を與へ希望を述べ、以て直接なる理想の供給者、未來の撰言者となるなり、其れ即ち現代史の一般歴史に相異する特典にして、兼て之が特殊の價値の存するところ、これが編述者の權威と責任と兩ながら大なる所以なりとす。文明事項の何たるを問はず、都て現代史と稱せらるるもの、意識正にかくの如し、文學に關する現代史の意義亦此範疇に漏れざるべきなり、予は現代文學史の意義を計へて、其二個を得たり、而して其意義を満足せしむべく生れたるものを、明治文學史とす、君は論の人に於て同時に詩の人なりとせば、予が常に難しきいへるこ

ころなりき、かくして君が文學史は幾と我等が理想的のものなりぬ、予君が好著を反説して反響談嘆するに由なく、即ち秀筆を呵して敢て所感を披瀝せり、我が才の非と文の拙との如きは、之を省るに遠なきを奈何、予が文學史を讀みて、取あへず歡喜措く能はざりしものは、其叙述の文學史的なるも、篇章の安排の巧絶なるもの二つなりき。抑も明治年代の文明たる、其年代の批駁的短少なるにも、いはらず、其物質的及精神的の兩面に於て、特に錯雜紛糾を極むる、此間の趨勢を遂観して、文學思潮の變遷を述るる如きは、決して容易の業にあらず、而かも君は敢て此迷宮にわけ入りて、歩武整然、層裡精妙の時、展覧に能く千方條の遠路を識別して、孰れ最奥の金輪に觸れざるはなし、次に篇章の安排の巧妙に至りては、本書を一讀せしもの、既に知悉する所、恐くは喋々を要せざらん、著者自ら此書に試みしが如きは、一の試験に過ぎずと謂ふも、是恐らくは自謙の言、畢竟斯くの如き安排を試みしが故に、斯くの如き成功を収め得たるもの、吾斯くの如き叙述を試みんには、勢斯くの如き安排を取らざるを得ざりしもの、斯くて君は苦慮刻劃の末、斯くの如き安排を敢てせしものに非じ、寧ろ君が謂ゆる試験にあらざりしを賀せざるを得ず。

は俳句和歌なるが如し、特に小説を論評せる、こ前後百七十頁に互り、全頁數の幾と半數たらんとす、従て其新見卓絶の多きも、亦此部分な以て最とす、けにや明治文學の中心は小説にして、其歴史に於て最も多く、其發達に於て最も著しきとす、されば明治文學史は、一面幾と小説史なるの觀あり、従つて之が論評の、最も困難なるべきことも豫め想像せらる。

すべきものあればなり、并は他にあらず、凡て此種的好著には、完全の上にも完全を期し、假令少し頁を増すとも、人名及番名の索引を附するも、然らざれば、目次の條下に細目を附すること、尙望むべくは文學年表を附し又必ず正誤表を附せんことこれなり、こは甚だ些々たる事の如きも、書肆、著者及讀者に對して、必らず正に支拂ふべき義務たるべければなり、明治歴史全集の將來を想ふて、之を庶幾するの情に堪へず。

而かも君が積年の注意と燃評眼とは能く此至難の材料を整理して一糸亂れず、宛ら規整然たる、一大博覽會場に入るの感あらしむ、新體詩は君自ら能くするもの、之が評論の靜到該切なる、固より其所なりと謂はざるを得ず、俳句又君自ら指を染めしもの、其俳句趣味と論して他文明に見るべからざる、一種特異のものとなし、幾と宗教的ならんとするを斷せしか如きは、到底門外の者の想到し能はざる所、君が卓見を推さざるを得ず、又和歌を論して、其革新の後れたるを説くや、新體詩の創始者は、其精神に於て、和歌の革新者にして和歌は到底革新の手を下す價値なしとして、之を拋棄せしに基くと斷せしが如きは、是又君が炯眼と稱せざるを得ずと雖も、予、なして敢て君が白玉の微瑕を究めしめば、其俳句を和歌との評論に於て、聊か足らず、論して聊か穿たざる所なきを想はしむるものなり、然れども固より一小部の事、月前の螢火の微かなるに比すべく、却て其卓見を集め來れば、汗牛充棟僕を換ふにも尙及はざらんこと。

今日、現代文學の一大パノラマといふべき、本書の刊行を見るを得たるは、胸に其時機を得たるものと謂はざるを得ず、而かも其所論議せず偏せず、論定毎に中正を得て、而かも的確温厚にして、而かも周匝之を統ぶれば、衆目悉く張り、微を穿ては、痒きを搔く、如く、加ふるに詞藻の豐贍と文辭の雅麗とを以て、可らざらむと欲るも得べからず、予は其内容形式に幾度理想的の現代文學史を得たる事を慶賀するを共に、時代を劃せる一代名著として、之れを江湖に推奨するに憚らず。

明治文學史

東亞之光批評

暫く岐路に入る事を許せ、明治歴史全集、發兌の警鐘に向つて切望

本著に對しては志田學士が、本誌の評論に所見を開陳せらるれば、吾人の批評は見合して紹介にと、む、井上博士の序文に、維新以來卅九年の歴史は大變化にして又大進歩なり、故に卅九年の歴史も我那の歴史の一部分として十分に研究を値するものあるを知る

と、坪井芳賀の二博士と相謀り明治歴史全集の編纂を企圖せられ、各専門家を以て之を分擔せしめられ、その一篇として現はれしは即ち此稿也。

全集を三期に區分し、第一期は前代繼承の文學より新文學の先驅、即ち明治の初年より廿年前後、佳入奇過、雪中海等の政治小説に至る迄を説き、第二期は固有思想の反動より新體詩及戯曲の興起に及び廿七八年の交に至る、第三期は以後現代に及ぶ曲折を説く、紛糾錯雜なる明治文學の中に、系統を正し序を追ひ、區畫を定めてシステマタイズしたる著者の技能は、確に賞讃せざる可からず、案より四百頁に充たさるの中に、諸方面を説くが故に、各個人に付ては説いて詳ならざるありし雖も、善く全網を掴みて洩さず、且つ文章巧にして筆致流麗なるが故に、尙一層の光彩を添ゆ、吾人は初めて得たる明治文學史に、この好著を得たるを嬉ぶ。

新潮批評

明治文學史 (岩城準太郎著)

之を待つこと久しうして、こゝに始めて各方面に博達精進なる本史を得たり。蓋し現代史中其文學史編纂の業の如くしかく至難なるものは他に能くあらざる可し。在來三千年の歴史が作れる思想趣味の複雑多様にして而かも何等の歸趣なき無限大の暗板上に、世界各國各種の思潮は、時の速さと共に投影し來り投影し去りて、紛糾錯雜し、また替て何物の形も具へざる寫眞を以て、之が唯

はと問はれ、何人も指を現代に風するを附隨せざるべし、明治の文學は廣く各方面に亘り、小作極めて多くして傑作少なく、隨て之を研究し概括して其文學史を編せむことは頗る困難なる事業なり故に既に四十年を経過して猶見るに足る程の文學史一もあるなし、たゞ大和田氏の「明治文學史」ありし雖、既に十數年前に出でたる者にして殆ど言ふに足らず、近く高橋淡水氏の「時代文學史」ありし雖、亦稍や雜駁にして間々不公平なる見解あるを免れざりしが、本書は前二書に比して聊か吾人の意を満たすに足るもの、如し、此書は元來坪井博士等の監修の下に編纂中なる各方面の明治史中の一編として出でたる者にして、明治文學を分ちて三期とし、其各期の特色を觀察して之が思潮の流れを究めむと試み、而して各種の文學を各期に分ちて論じたる等極めて佳く、之を「時代文學史」が單に各種の文學を各別に陳べたるに比して、編輯の體裁亦宜しきを得たりと謂はざるべからず、たゞ四百頁に足らざる小冊なるが爲めに、殆んど引例を挿むこと能はず、又説いて詳しきこと能はざるを憾みとすれども、兎も角從來のものに以て満足する能はざりし讀書子の一時の渴を醫するに足らむ。

時事新報批評 (明治文學史)

本書は、坪井上野次郎博士並に、坪井九馬三、芳賀矢一兩博士監修の下に、幾年かの後を期し大成せんとする、「明治歴史全集」の第一巻として世に問はれたるもの、著者は岩城準太郎氏にして、文理井然

一の資料とするの外幾何許の組織的史料もあらざる也。この渾沌たる暗界に唯能く自家自ら信頼し得べき批評と判斷との燭を秉りて進まんとする。昔景行の朝武内宿禰が茫漠たる葦原の地に國縣郡邑を定むるや、猶ほ山河阡陌の界を劃すべきものなり、世界の迷途を辿るに猶ほ行くべき道な存せり。我が岩城文學士が探らんとする現代文界に何の山河阡陌あり、何の道路ありて之を標識するを得べきか。明治文學史の行程や夫れ蓋に至難なるかな。嘗て早稻田文學の出づるや、其彙報は彼が特色として明治史の史料たるべき各藝術界の既往を語れるものありき。されど其組織的史料として之を見るに未だ充分ならざるを得ざりき。即ち之を以て岩城文學士が功を奪ふといふに遠く相及ばざるものあるや言を待たざる也。彼が「明治文學史」は其史料の該博豊富なるに於て先づ之が價値を認むべく更に其組織的按排の妙に至りて刀を執つて亂麻を斷つる概ありといふべし。常に思想の變遷と趣味の傾向とを稽へ、一期々々に中心を見出しつゝ螺旋的に歩を進めり。この故に文字最も緊密にして精到なる觀察は仔細に躍動せるも嘗て冗漫の一句を見出さざる也。若し夫れこの螺旋形的史料を取り一直線ならしむるを得んか、即ち決して菊版五百頁の少冊子を以て能く完結し得らるべきにあらざるべし。余輩はこの種の熱心且つ親切なる著者の續出せんことを望まざる可からず。

萬朝報批評

▲明治文學史(岩城準太郎著) 日本文學史中最も研究に困難なる

よく委曲を悉くして、遺憾なき著者の文致は、確かに本書の價値を重からしむる力あり。言ふ迄もなく明治の文學は、今尙ほ混沌たる過渡期にあり。舊文藝復興の氣運に乗し、一千年間浸潤し來れる、支那印度思想が、純然たる我文學思想となりて現れし、江戸文學の後を繼承し、新たに泰西の文藝と接觸し、茲に始めて世界的發展の途に就かんとする、過渡時代にして、本書は實に此興味多き、而も最も研究に困難なる、明治文學の概略を髮髻せんを試みたるものなり。從來も此種の著書なきにあらざるも、未だ目としてカーソリチヤーンとするに足るものなかりしに幸に、今此一編を得たるは、文壇の爲に最も喜ぶべし。

唯、其範圍が純文學に限られたると、其文學評論と新聞雜誌とが、時文運に及ぼせる影響を略叙せるに止めしは、甚遺憾とする所なり。著者は先づ明治文學の發達を三期に分ち、第一期の前代繼承の文學に筆を起し、幕末變亂の爲加へられたる大打撃と、泰西物質的新文明の爲に蹂躪破壊し盡されたる、暗黒時代に孤々の聲を擧げたる、明治の文學が、外來の思想によつて如何なる變化を受けたるかを述べ、時代の先達として學者側にては福澤、中村、二家を始め、著作、鳴門、福地、尺諸家を擧げ是等の諸家によりて開拓せられたる、新文學の發展に與つて力ありし新聞雜誌の沿革より、假名垣魯文、古河黙阿彌等によりて代表されたる、繼承文學、明治十二年前後に萌芽を發せし宮崎夢柳、小室案外等の翻譯小説、藤田鳴屋、東海散士末廣鐵馬居士等の政治小説の勃興に論及し、更に第二

期に進んで固有思想の反動より、文學思想の成行きを述べ、代表的
作物として外山、山の「新體詩抄」、坪内逍遙の「小説神髓」、新寫
實小説の粉本ともいふべき「當世書生氣質」、「二葉亭四迷の「浮世」、
森田思軒の翻譯小説をあげ、眞小説の興起に伴ひて現れたる作家
若くは「我樂多文庫」の尾崎紅葉、巖谷健、石橋思案、川上眉山、山田
美妙等の硯友社一派小説、五重塔に洛陽の紙價を高からしめし幸
田露伴、むら竹、寶庭窓村、正直正大夫、齊藤綠雨、嵯峨の屋主八、矢
崎おむろ、桐草紙の森鷗外を推し傳奇小説の興隆を論じては矢野
龍溪、村上浪六、黒岩涙香等を戯曲の作家として逍遙、福地櫻痴を
擧げ其作物について巨細の批判を下し一轉して第三期に入るや文
學興隆の因縁文學傳信の傾向を論じ俳句にして正岡子規、紅葉河
東、柏橋桐、高濱虛子、内藤鳴雪等を、和歌にしては落合直文、與謝野
幹、同晶子子規を、小説にしては觀念小説家としては泉鏡花、眉山、廣
津柳浪を、心理小説としては樋口一葉、女史、江見水陸、田山花袋、小
栗風葉、後藤寅外、小杉天外等を新體詩にしては井上巽軒、武島羽衣、
鹽井雨江、櫻幹、子規をはじめ、落梅集の島崎藤村、落梅集の瀧田
泣菫、天地有情の土井晩翠等を、戯曲にて逍遙の「桐一葉」孤城落
月、「牧の方」を推し更に百尺竿頭一歩を進め最近の文學を論
じては紅葉門下の風葉、鏡花、柳川春葉、徳田秋聲一派、不如歸の
鶴宮蘆花、「無花果」の中村春雨、「己が罪」の菊地蘭芳、「破戒」の島
崎藤村、片男波の田口瑠江、「寒風戀風」の天外、「天つ波」の露伴
によりて小説界を代表せしめ、戯曲にして鷗外の「玉匣雨消島」逍

讀賣新聞批評

述の「新曲浦島」をあげ將來に論及し、過去文學の大星續々落ちて
新陳代謝の期日に迫り、一方に於ては外征の大捷國民の自覺と國
力發展を喚起し、文壇の前途頗る光明に充てり。
目下の沈靜は衰亡近づける時のそれに非ずして將に勃興せんさす
る時の其れなり新思潮に出でたる新文學起らざるべけんや」と叫
べり巨細に之を論せんさ欲せば其非さすべき點二三に止まらざれ
共所說概ね公平にして職見凡ならず、文章も亦極めて平易にして
難解の文字なく、よく論旨の委曲を悉にして遺憾なし、眞に近代文
學界における有益の好著といふべし、猶本書に限らざる事ながら
定期刊行物は宛に角、堂々たる單行本に活字誤植頗る多きと、有名
無實なる監修者の學位姓氏を列記する事は好ましき事にあらず、
現に本書の監修者の一人坪井博士が巻頭に序して、從て私には明
治の文明と申すものを一向知りませぬ、其存否さへ岩城文學士の
著を見まして、始めて幾分の智識を得た位であります。」と自白さ
れたるは、正直といへば正直かも知れぬとも、監修の名に對して、
あまり無責任なる言辭に非らずや。

九州日々新聞批評

○明治文學史 文學士岩城準太郎著
井上、坪井、芳賀三文學博士監修の下に明治歴史全集編輯の事あり
本書は第一編として出版する者にして岩城準太郎氏の筆に成る先
づ之を明治の文學を三期に分ち前代繼承の文學、新文學の先驅よ
り新文學の思想、新文學の勃興、文學の轉進、最近文學の概觀等に
涉り時代を脱き變遷を脱き更に各文壇大家の思想作品を評論して
精に入り細に及び文章は流麗、取材は豊富、作者苦心の迹を認むべ
き者あり誠に明治文學の大立者たる紅葉二家の比較評を爲せし一
節を抜かん
是に於てか吾人は彼の硯友社一派の代表者たる紅葉と比較する
の甚だ興味あるを思ふ、夫れ紅葉は都市生活の寫實小説家なり
其觀察及ぶ所頗る狹隘にして人物の舞臺や常に作者主觀の限界
を出でず到底彼の人生の種々相を包括し千狀萬態の社會人物を
驅使する客觀的寫眞の大筆力を望む可らずと雖、描寫の方法は
頗る客觀的に近し、故に其假作の人物は假令作者の性格に似其
主觀に入り易き範圍に限らるゝと雖、悉く現實の社會に見らる
べき性格にして決して作者の意志を以て造り出したる者に非
ず。露伴に至りては全然赴を異にして、其想を構ふるや常に一
個の觀念の上に立ち、其人物を描くや常に一個の理想の上に寄
する。故に其筆流れて脚色の單調となり、人物の一律となり作者

直、福地源一郎、成島柳北、高崎正風、老泉堂永機、假名垣魯文、古河
默阿彌、東海散士、矢野龍溪、末廣鐵腸あり以て其梗概を知るべく
第二期に至つては歐化思想に對する保守思想の反抗より更に進ん
で文學思想の革新となり坪内逍遙の「小説神髓」當世書生氣質」外
山、矢田部、井上等の手に成る「新體詩抄」また此時に著はされ小説
と韻文とに於て誰かに一新紀元を畫せられ長谷川四迷、森田思軒、
山田美妙、尾崎紅葉、幸田露伴、齊藤綠雨、森鷗外、黒岩涙香等其間
に起り或は創作に或は翻譯に各自思ひ々の天才を發揮し第三期
に於ける新文學の勃興は我邦空前の盛況にて俳句は正岡子規、尾
崎紅葉、大野西竹等の各派に依て革新され和歌は落合直文、與謝野
鐵幹、同晶子、佐々木信綱、正岡子規等の各派に依つて、著しく面目
を改めしが小説に至つては特に長足の進歩を見るべく作家には泉
鏡花、廣津柳浪、樋口一葉、小栗風葉、後藤寅外、島村抱月、小杉天外
徳宮蘆花等の諸大家輩出し新體詩また稍や進境を現はし就中戯曲
に於ける逍遙の議論と其作品とは以て新界の重鎮たるに足るもの
ありと云ひ、主として代表的作家及び代表的著作を取りて文學發
展の迹を辿れるもの願ふに明治文學の興隆は我國力の發展に伴ふ
必然の現象にして然も今日まで之を一貫せる文學史のあらざりし
は世の遺憾とする所なりき此書若し細密に之を解剖せば時代の區
別作物の品評等或は異論なきに非ざるべきも此種の著作の嚆矢と
して之を歡迎せざるべからず

其人の面影至る所に其光鑑を閃出す蓋し作者學博く識高く篤く藝術を愛し深く佛典に參ず、されば人情を寫すや闡明詳に過ぎ割折細に入り作中の人物悉く酸いも甘いも啗み別けたる悟蓮の人たらんや、人情の偽多きを知りては一旦の恨に神を憤り佛を憤りし者も翻然悟り來りて「浮世を見れば皆面白き人様々、憐れりし時の胸の氷碎けて東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身も面白く佛も可愛く凡夫可愛く天地に一つも憎き者なく」此の身りしは獨り「對面樓」のお妙のみにあらず
以て作者の文致と評論の體裁とを知るに足らん五百頁の美本近來の好著たるを知るべし

大阪毎日新聞批評

○明治文學史 岩城準太郎著

明治歴史全集の第一編として出でたる岩城文學士の新著なり過去明治文學を三期に分ち前代繼承の文學より政治小説を一期し小説神髓以來日清役前に至るを二期し以後最近日露役前に至るまでを三期として七章に分説し代表的作家作品を擧げて形勢を評論せることよく首尾を得四十餘年間の明治文學の變遷は髮髻概観すべし著者がよく之を咀嚼したる述作の功勞多大なりといふべし但だ夫れ此書純文學に限り文學評論の事に及ばず又文學に依りて見るべき思想界の交際の點檢に及ばざるがために能く述べて能く作らざるの憾あれども過去に於て眞に明治文學史として見るべきものは此の書にして始めてこれあり近來の良書といふべし

(明治歴史全集)廣告

- 東京帝國大學文科大學教授 文學博士 井上哲次郎 監修
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 芳賀矢一 監修
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 上田五拾錢 内地送料 十二錢
●明治文學史 並製 壹圓也
- 野田 義夫 定價 壹圓六拾五錢 内地送料 十二錢
●明治教育史 新版
- 文學士 小林郁編以下逐次刊行
- 明治文明史 文學士 加藤玄智編 全
- 明治宗教史 文學士 大塚武松編 全
- 明治外交史 文學士 大塚久 共編 全
文學士 上原益藏 共編 全
文學士 齊藤隆三
- 明治政治史 文學士 宮尾木智住編 全
- 明治美術史 文學士 水谷猶象編 全
- 明治交通史 文學士 水谷猶象 共編 全
文學士 芝 義盛 共編 全
- 明治殖産史 文學士 阿部秀助編 全
- 明治財政史 文學士 松井等編 全
- 明治軍制史 文學士 栗林己巳編 全
- 明治戦史

明治四十二年六月十二日印刷
明治四十二年六月十五日發行

增補明治文學史

不許複製

定價金壹圓

著者 岩城準太郎
發行者 坂上忠之介
印刷者 松澤瓦三
印刷所 東京市麹町區下六番町十七番地 同 勞舍

發行所

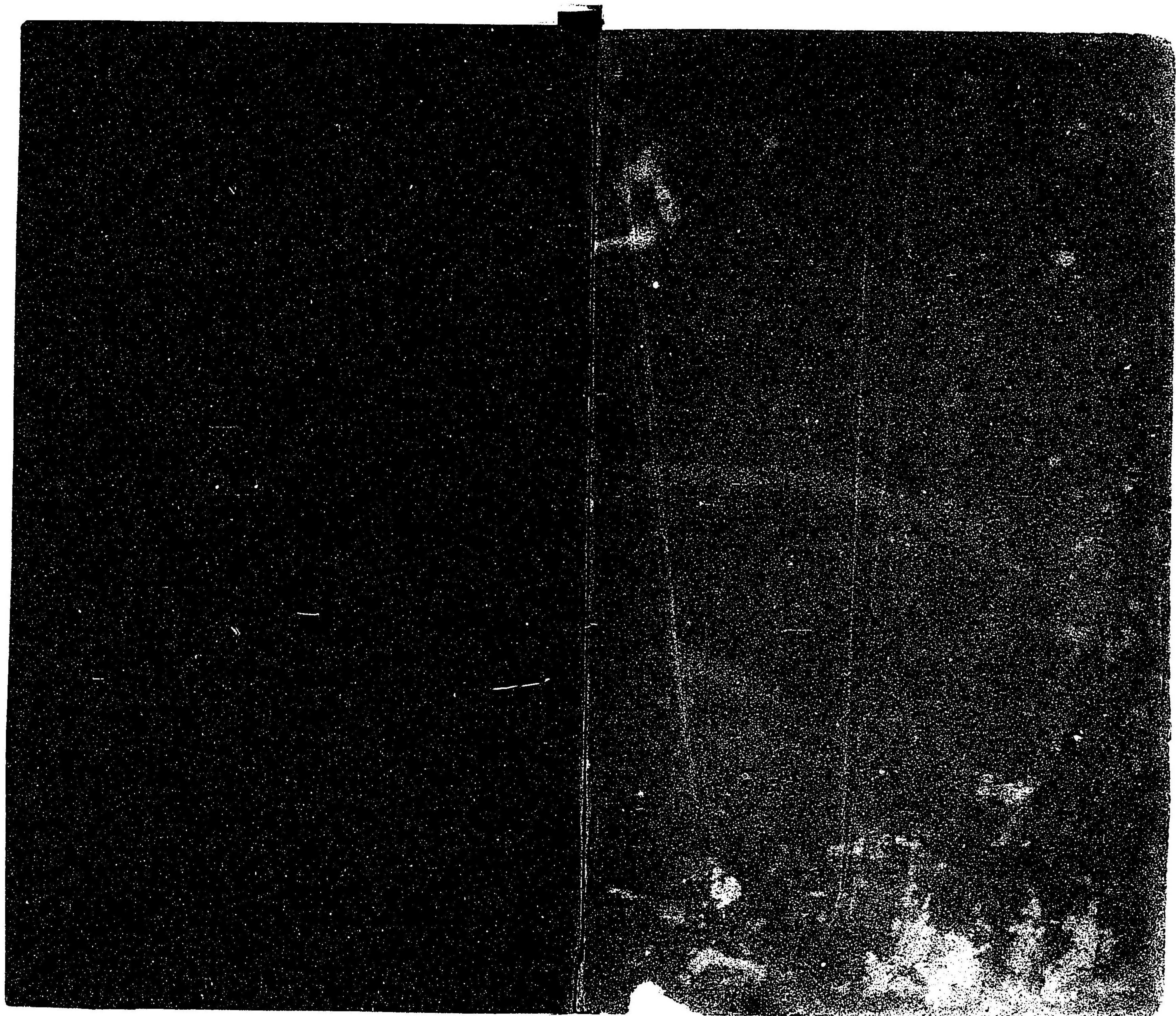
東京市京橋區柳町十二番地

育

英

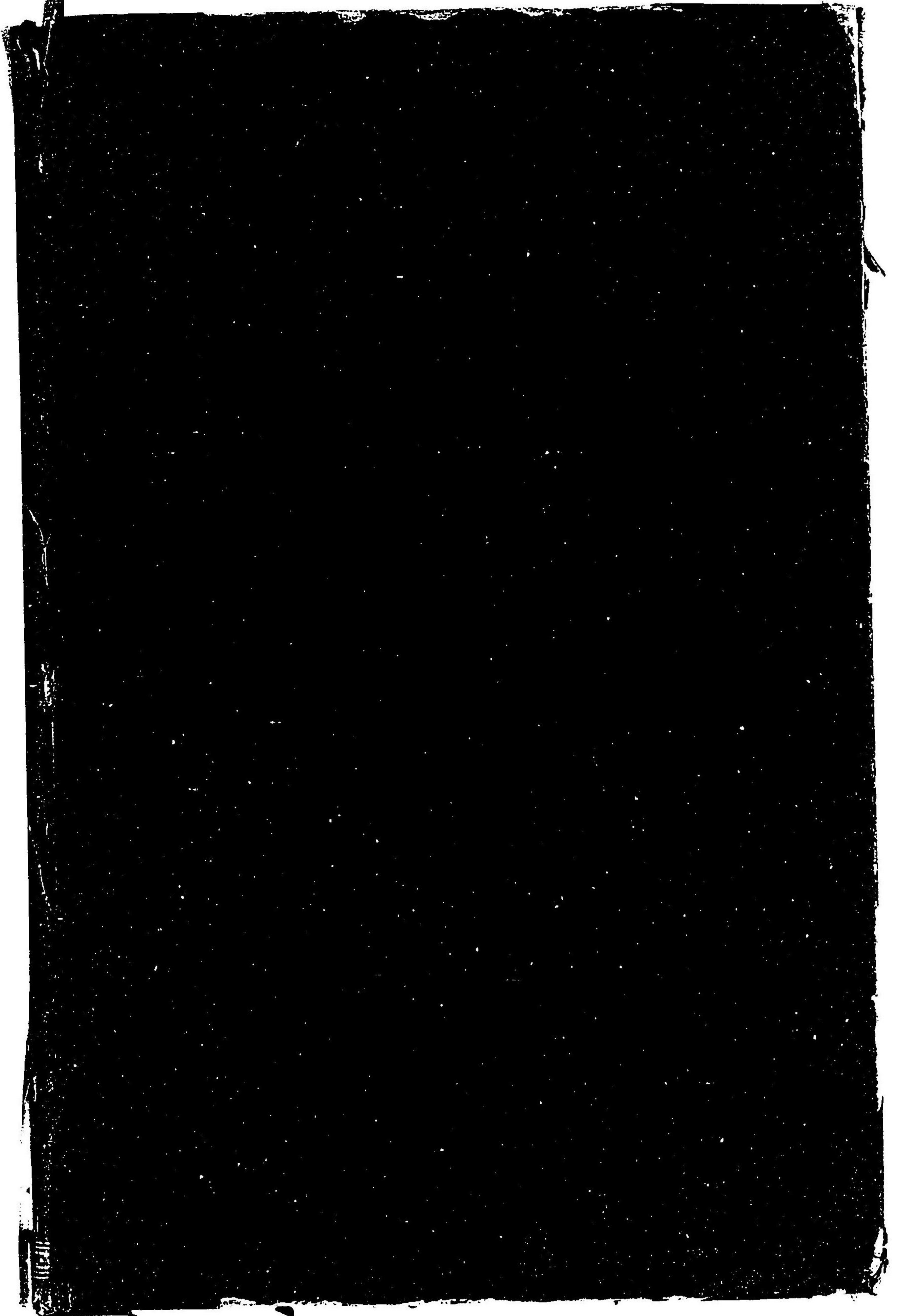
舎

電話二二九一番 振替口座東京三〇八九番



40
1
792

3



40
792

084995-000-1

40-792イ

明治文学史

岩城 準太郎 / 著

M42

DBB-0425



